

小神明遺跡群II

-小神明地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財
発堀調査報告書-

倉 本 遺 跡
九 料 遺 跡
西 田 遺 跡
大 明 神 遺 跡

1984

前橋市教育委員会

柏川村出土文化財管理センター

序 文

近年、各地でも埋蔵文化財の発掘調査は急増の一途をたどっております。昨年度の県下の埋蔵文化財の発掘調査の届けは、立入検査に終ったものを除き、一昨年より53件増えた163件であったとのことです。

その結果、考古学のみならず、歴史学上の大発見とされる成果があがり、新聞等でたびたび報じられるようになっております。

もとより、発掘調査は、調査とひきかえに遺跡を破壊することであり、できるならば現状保存されることが最適であることはいうまでもありません。しかし、各種開発事業の急増は、それを許さない状況であります。

本市においても、各種事業に伴い、遺構が直接破壊を受ける部分については、文化財保護法の規定により、事前の発掘調査を実施しており、今年度は、この小神明遺跡群IIをはじめ、9ヶ所に及びました。

本報告書作成の緒となる小神明土地改良事業も、昨年度から始まり、今年度で二年目をむかえるものであり、昨年にひきつづき、道水路予定部分や、削平を受ける部分について発掘調査を実施したものです。

くわしい発掘調査の内容は本文にゆずりますが、この地は芳賀郷、桂萱郷といった平安時代の「和名類從抄」に名をとどめる地でもあり、芳賀の团地遺跡、奈良三彩小壺を出土した桧峯遺跡や多くの古墳など、各時代の遺跡が、数多く残されているところです。

今回の発掘調査によって、この地の歴史の頁をひとく貴重な資料をまた一つ、つけ加えることができたのではないかと思っております。

頗るくば、この報告書が、地元関係者や、歴史を学ぶ人々の資料として使われ、埋蔵文化財に対する理解と关心を深めるために役立つことを希望いたします。

最後になりましたが、58回体の年という、本市にとっても人変忙しい中、発掘調査にたずさわった担当者、作業員の方々の努力をねぎらうと共に、この調査に御指導、御助言、御協力いただいた地元土地改良区の役員、土地改良連合会、地元の方々に深く感謝するものであります。

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

1. 本書は、昭和58年度小神明土地改良事業に伴う、小神明遺跡群IIの発掘調査報告書である。

略称は58C-1である。出土古墳は西田1～5号墳と命名した。

2. 小神明遺跡群IIは、以下四ヶ所の遺跡からなっている。

倉本遺跡	前橋市鳥取町字倉本103-12他	433m ²
九料遺跡	前橋市勝沢町字九料1032-1他	700m ²
西田遺跡	前橋市鳥取町字西田92他	2,204m ²
大明神遺跡	前橋市小神明町字大明神496他	1,100m ²

3. この発掘調査は、土地改良事業により遺跡が直接破壊を受ける部分について、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、小神明土地改良区の委託を受けるとともに、昭和58年度文化財保護国庫補助金、県費補助金、市費補助金を受けて実施したものである。

4. 発掘調査は、昭和58年5月23日から8月30日、11月16日から12月12日まで実施した。整理作業は、昭和59年3月31日まで行なった。

5. 担当者は、前原照子、木暮誠、前原豊、中野和夫、井野修二である。事務局は福田紀雄、布施和男、町田信之である。本書の発掘写真は担当者、本文及び編集は井野が行なった。

6. 遺物の実測は、金井君江、岩木操、亀井弘美、柴崎富子、城田和泉、工藤富貴子、水野キクエが担当し、製図は滝山吉司と青柳宏枝が行なった。遺物写真は井野である。

7. 本遺跡の資料は、前橋市教育委員会の管理下に保管されている。

8. 発掘調査作業員（順不同）

野中一七治、木村真弓、工藤富貴子、宮本裕子、前田一成、高島康、楳塚佳子、渡木秋子、下山峯子、岩木操、天田玄市、平林ふさ、佐藤龍家、横堀ます、佐藤真寿雄、平林要、佐藤藤衛、滝山吉司、中島幸重郎、登丸たけ、角山もと江、中島つる、福空良子、大沢はづ五十嵐くま、鈴木こま、平林チヨ子、下田とも子、鈴木孝子、松村ふさ、平林タカ、大沢スミ江、大沢みさ、亀井弘美、古松英太郎、倉茂尚子、加部二生、宮石明彦

9. 遺物整理及び報告書作成作業員（順不同）

金井君江、岩木操、亀井弘美、柴崎富子、城田和泉、工藤富貴子、水野キクエ、福島裕子、竹内敏江、滝山吉司、下山峯子、青柳宏枝

10. 発掘及び遺物整理においては、次の諸氏から、御指導、御助言をいただいた。心より感謝を表する次第である。

新井房夫、右島和夫、柿沼恵介、加部二生、小神明土地改良区役員一同、土地改良区連合会

凡 例

- 各遺構の縮尺は $\frac{1}{20}$ を基本としている。ただし、カマドの平面図は $\frac{1}{40}$ である。古墳平面図は $\frac{1}{200}$ 、古墳主体部は $\frac{1}{10}$ である。
- 各遺物の実測図は $\frac{1}{20}$ 、拓本は $\frac{1}{10}$ であるが、特殊なものについては $\frac{1}{20}$ 、 $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{5}$ とし、図面に示した。
- 遺構平面、断面におけるスクリーントーンは、以下のように使用した。

地 山 205	焼 土 112	漆 91	貼り床 704	白色粘土 22
------------	------------	---------	------------	------------

振り扱し 81	表 土 413	漆 屋 426	A.B.C.FA 112	炭 化 物 320
------------	------------	------------	-----------------	--------------

- 水糸レベルは、原則として各遺構ごとに統一した。
- 小神明遺跡群IIは、4遺跡に分れているが、遺構とナンバーは、調査時の混乱をさけるため、通しでつけてある。

本文目次

序 文 前橋市教育委員会教育長 金井博之

例 言

本文目次

I 発掘調査の経過 1

II 遺跡の位置と周辺の遺跡 2

III 遺跡群の全体と概要 3

倉本遺跡

弥生式土器を伴う遺構 5

その他の遺構 10

まとめ 10

九料遺跡

縄文土器を伴う遺構 12

鬼高I期の土器を伴う遺構 15

その他の遺構 47

まとめ 48

西田遺跡

縄文土器を伴う遺構 50

和泉期の土器を伴う遺構 56

古墳 67

その他の遺構 86

まとめ 87

大明神遺跡

鬼高II～III期の土器を伴う遺構 89

その他の遺構 95

まとめ 95

I 発掘調査の経過

小神明地区では、昭和57年度から土地改良工事が実施されている。それに伴い、埋蔵文化財の発掘調査が実施され、本報告は、その2年目にあたっている。

昭和58年度の調査に到る経過は、以下の通りである。

昭和58年4月15日 土地改良区、農政部、教育委員会の三者による協議。

昭和58年5月2日 土地改良区より調査依頼が来る。

昭和58年5月9日 調査地設定。

今年度調査地点は4ヶ所に分かれ、養蚕の関係もあって、5～8月と11、12月に分けて実施することになった。地区名はA、B、C、D区と仮称した。A区は倉本、B区は九料、C区は西田、D区は大明神遺跡である。

5月23日 ひっこし、A区調査開始

5月25日 B区調査開始

6月2日 A区調査終了

6月6日 C区調査開始

7月15日 新井房夫先生、地質調査のため来訪

7月16日 現地説明会を実施した。

7月25日 高所作業車による全体写真撮影。

8月1日 B区調査終了。

8月30日 C区調査終了。

11月16日 D区調査開始。

12月12日 D区調査終了。

3月31日 遺物整理作業、報告書刊行の準備作業終了。



現地説明会スナップ 7月16日

測量基点については、ABC区の水準は「小神明土地改良事業平面図2」の大正用水際のBM6の141.857mより係員によって移動。D区の水準は「同平面図4」のD区東端の道路際BM12 124.451mより係員によって移動。国家座標は、測量会社に委託して設定した。

A区 A-2 (X 46.117721, Y -65.496596) X-2 (X 46.031309, Y -65.520059)

B区 B-3 (X 46.358740, Y -65.416202) P-3 (X 46.305332, Y -65.433044)

C区 F-22 (X 46.071814, Y -65.313050) R-22 (X 46.023819, Y -65.313792)

D区 A-2 (X 45.849444, Y -65.993680) Z-2 (X 45.749440, Y -65.994576)

A区角度はN-15°11'29"-E、B区角度はN-17°30'08"-E、C区角度はN-0°53'06"-E、D区角度はN-0°30'47"-Eである。

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

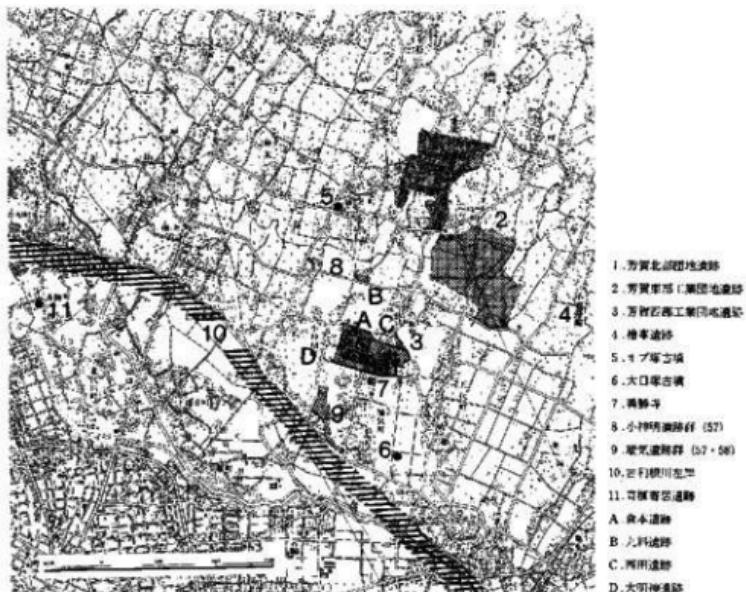


図2 遺跡の位置と周辺の遺跡

前橋市の中心部から赤城山に向かうと、平らな水田の広がる土地が途切れ、がけになっている所にあたる。ここは、三利根川が流れ、削りとられたがけである。がけの上は、赤城山の噴出物による台地で、数多くの河川により樹脂状台地が形づくられているところである。

本遺跡群は、旧利根川のがけより北に1kmほどのばった、標高120mから140mのところにある。群内の各遺跡の位置は、位置図中にA B C Dで示してあるが、周囲には、縄文時代から古墳、奈良、平安時代をへて、戦国、江戸時代まで続く遺跡が密集している。

本遺跡群との関連でいえば、隣接の芳賀西部工業団地遺跡で、縄文前期の住居7、古墳31が検出されている。又、芳賀東部工業団地遺跡からは、縄文前期の住居39、縄文住居13、後期の敷石住居6、古墳4、住居75、奈良平安住居420、堀立柱建物194などを検出している。昨年の小神明遺跡群では、縄文、古墳、奈良、平安の住居11軒、堀立柱2を検出している。大明神遺跡(D区)に隣接する端氣遺跡群では、57、58年度の調査で、縄文住居2、古墳時代の住居17軒、方形周溝墓2、石敷造構3、環濠1を検出している。

遺跡群の現状は、水田と桑畠であり、桑畠は微高地となっていた。

III 遺跡群の全体と概要

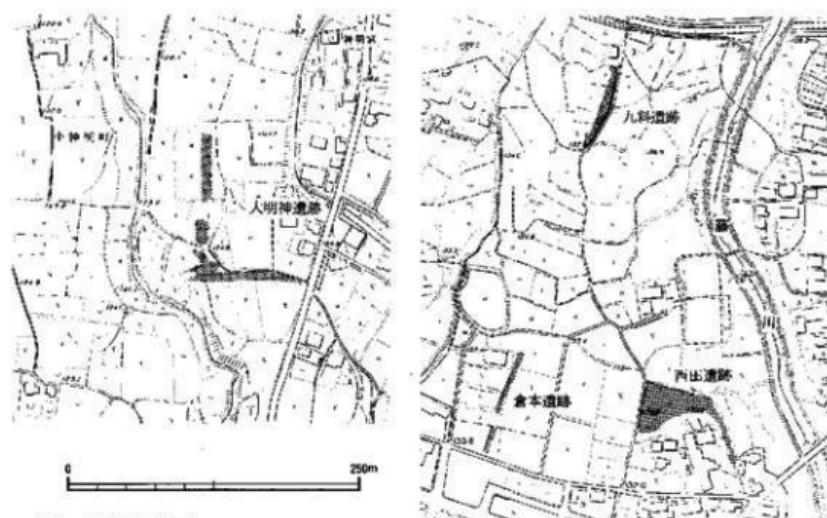


図3 遺跡群の位置

倉本遺跡 (A区)

調査面積433m²。弥生時代中期から後期の住居跡2軒、戦国時代以降と考えられる環濠を検出した。他に近世の溝2条、ピット21基を検出。住居跡の内1軒は焼失住居。縄文土器の散布が見られた。遺物はパン箱で5箱。

九料遺跡 (B区)

調査面積700m²。縄文時代系名寺式期の敷石住居跡1軒、鬼高I期の住居跡9軒を検出。他に同時期から近世に至るピット9基と、B軒石堆積の溝1条を検出した。住居覆土最上部からF層を確認。縄文土器は他に堀之内と諸磯が散布。遺物量は48箱。

西田遺跡 (C区)

調査面積2204m²。縄文時代開山式期の住居跡3軒、和泉期の住居跡4軒、6世紀中頃の古墳5基を検出。他に溝3条、道路状遺構1、ピット35基を検出した。遺物量は52箱。

大明神遺跡 (D区)

調査面積1100m²。鬼高II～III期の住居跡2軒を検出。他に溝5条、土坑6基、井戸1基を検出。溝の内1条は、覆土層下部に攪乱を受けたFA層が存在する自然河川。遺物量は4箱。

倉本遺跡(A区)

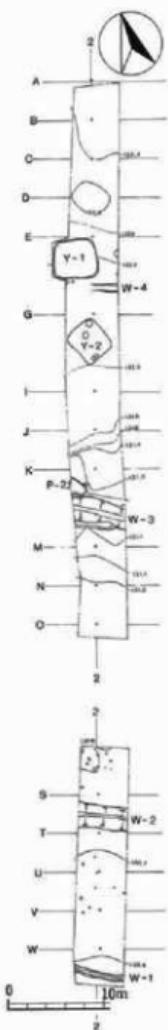


図4 倉本遺跡遺構分布図

倉本遺跡は、前橋市鳥取町字倉本103—12他に存在する。というよりも芳賀西部工業団地の北西で、道一本へだてた所であると言ったほうがよい所である。現状では、水田と畑地であり、昭和35年に小規模な土地改良が行なわれ、土地が一部区画化されていた。

土地は、自然傾斜で、南に行くにしたがって低くなっている。比高差は、南北間100mの間で2.5mである。

遺跡は、南と北に分かれているが、住居跡2軒は、北から検出された。遺物量が少なく、時代判定は困難であったが、弥生時代と判定した。

住居跡の内、北のものからは、多量の炭化材が検出され、焼失した住居と考えられる。

北と南で、東西に走る溝が検出され、遺物などから、方30mほどの環濠屋敷の堀と考えられたが、建物のあとは確認できなかった。

遺跡最南端の溝は、近世の新しいものであった。

表1 倉本遺跡標準土層図



1	黒褐色土 (7.5YR3/1) 耕作土約2~3%の小砾が混入している	20~25cm
2	褐灰色土 (7.5YR4/1) しまりのない土	15~20cm
3	黒色土、黒褐色土 (2.5YR2/1、10YR3/2)	20~25cm
4	黄褐色土 (2.5Y5/4) よくしまっている。黄色土の約2~3cmのブロックが少量混入	30~35cm
5	にじい黄色土 極少砂 よくしまっている	

弥生式土器を伴う遺構

① 第1号住居跡



第1号住居跡

遺跡北部に検出された隅丸形の竪穴住居跡。壁、床共にはっきりした形で検出されたが、柱穴、貯蔵穴は見つからなかった。周溝が幅10~21cm、深さ3~8cmで全周する。土層は基本的に5層、床面直上は炭化物の層、全体としてレンズ状である。C軽石を混入している。壁高は平均30cm、平均72°の傾斜をもつ。しっかり切りこんでいるが、北壁上部は、地山の礫により凸凹が多い。床面は、標準土層の第4層を切りこんで造られ、炉の北辺から四隅を除き、平坦で堅くしまっている。炉は住居中央部北に存在。構造は一部に石を使った地床炉。焼土と2個の焼石があるなど残存状態は良い。主軸方位は住居とほぼ同じである。床面全体にわたり炭化材が多量に出土していること、遺物の少ないことを考えあわせると、住居が使用されなくなって、まもなく火災になつたものと思われる。出土遺物は高壙、底部のみの土師器でありパン箱に1箱であった。出土遺物、住居形態から、弥生時代中期~後期のものと判定した。

表2

住 居	項目		内 容		
	主軸方位	N-15'-E		造り付け位置	住居中央北
	長 軸	4.55m	炉	長さ 1m	幅 0.5m
	短 軸	4.06m		主軸方位	N-15'-E
	面 積	16.46m ²		構 造	一部石を使った地床炉



第1号住居跡 炭化材出土状況

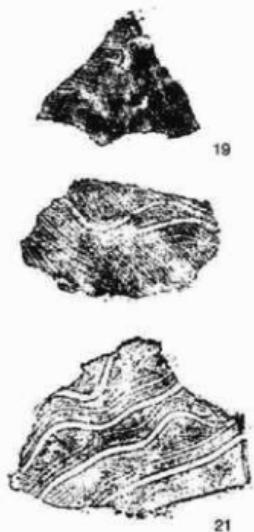


图5 第1号住居跡遺物

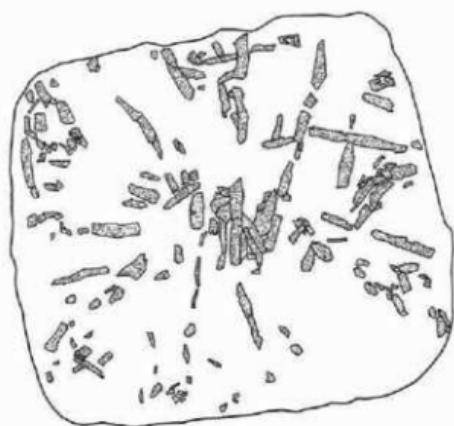


图6 第1号住居跡炭化材分布圖

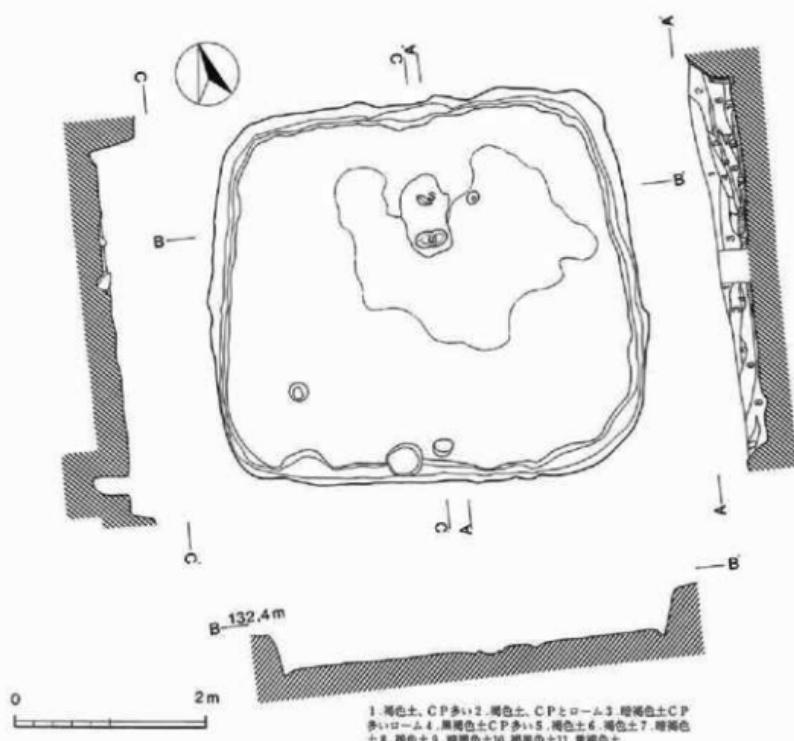
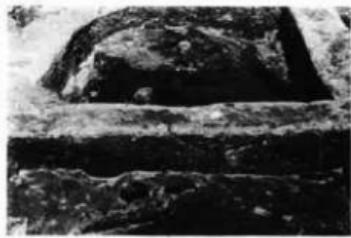


図7 第1号住居跡実測図



第1号住居跡 地断

② 第2号住居跡



第2号住居跡

遺跡北部、1号住居跡の南に所在する隅丸長方形の竪穴住居跡。南北に長軸をもち、西壁が東壁より短かい不整形プラン。柱穴4本を確認。深さ10~15cmで単純円形。南北間が長い。周溝が幅14~17cm、深さ2~7cmで全周する。耕作土が遺構直上まで覆っており、覆土は一層確認したのみである。壁はわずかに残っているだけで、確認壁高は6cmである。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。地床で、ふみしめられているが、あまり固くない。炉は住居跡中央部北に存在、地床炉で主軸方位は、住居跡とは18°の違いをもつ。住居跡は、ピットと重複している。ピットが住居を切っており、土層から、近世の堀りこみである可能性が高い。中央から西にかけてカマ堀りによって堀り取られていた。遺物量は少なく、パン箱に1箱であった。実測可能なものはない。石器は6点が出土、搔器、削器として使用したもののが3点、他3点は細石器である。遺物、住居形態を考え合わせ、第1号住居跡と同じ、弥生時代中期から後期のものと判定した。

表3

項目		内 容		炉	造り付け位置		住居中央北 長さ 51cm 幅 41cm 主軸方位 N-17°-W 構 造 地床炉、焼土が3~4cm堆積		
住		主軸方位			造り付け位置				
居		長 軸			長さ 51cm 幅 41cm				
		短 軸			主軸方位 N-17°-W				
		面 積			構 造 地床炉、焼土が3~4cm堆積				

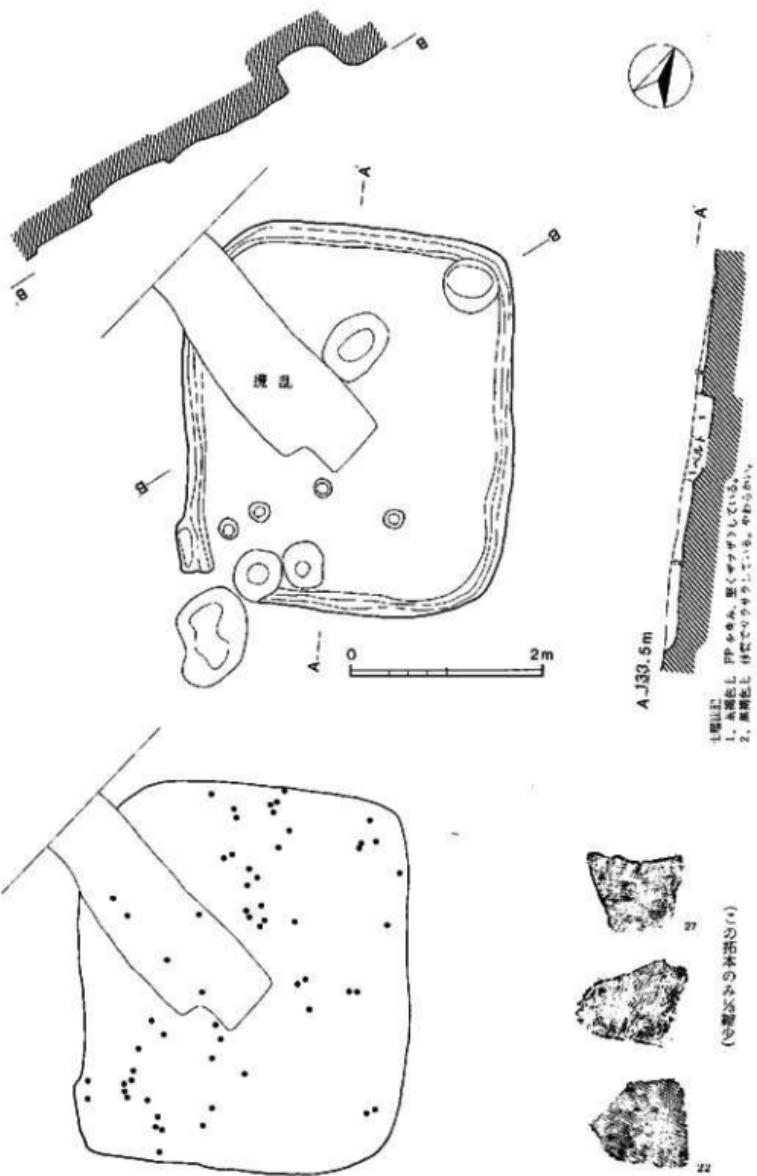


図8 第2号住居跡 実測図 遺物

その他の遺構

遺跡のやや南から検出された2本の溝は、ほぼ平行で東西にのびており、幅2.5m、深さ0.7mほどである。

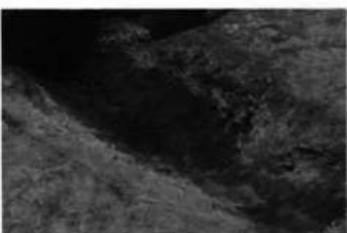
2本の間は、約30mあり、環濠の北辺と南辺を検出したものと考えられる。

溝の底からは、石臼や平底なべが検出されたことや、覆土の様子から考えて、戦国時代以降のものと考えられた。

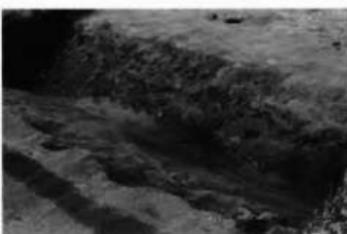
環濠の間からは、ピットが20基検出されたが、壠立柱建物などは確認できなかった。

環濠の北からは、ピットが1基検出されている。環濠を切っているところから、環濠より新しいものと思われる。

遺跡最南端の溝は、東西に走っているが、浅く土層から見ても、近世のものと思われる。



環濠（北側）



環濠（南側）

ま　と　め

事前の表面調査では、濃密散布地であった地域であるが、これは、近世の開墾と、約20年前の土地改良によって攪乱をうけたためのようであり、検出された遺構は、多くはなかった。

遺構確認面までは浅く、60cmほどであった。元々、まわりより低い土地であったとのことで、梅雨の時期のあと、溝から水はひかなかつた。

ここで得た成果は、弥生時代の住居を検出したことである。県内のみならず、市内でも弥生時代の住居の調査例は少なく、研究の一資料をつけ加えることができたと思う。

道路予定地部分のみの調査であり、地形から考えると、西の畠地に同時代の集落が続いているのではないかと考えられる。

九料遺跡(B区)

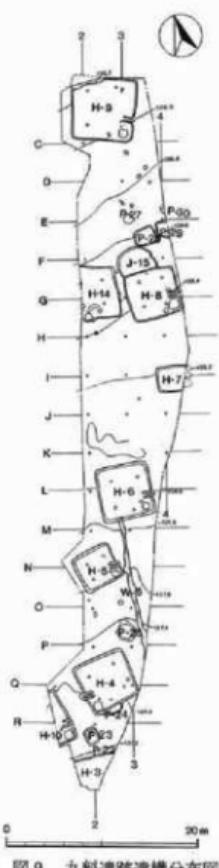


図9 九料遺跡遺構分布図

九料遺跡は、前橋市勝沢町字九料1032-1他に存在する。倉本遺跡の真北で、大正用水がすぐ北を東西に流れている。

現状は桑畠で、周囲の水田より20~30cm高くなっている。遺物が濃密散布しており、散布の様子と地形から、古墳時代と縄文時代の集落の存在が予想できた。

調査範囲は、桑畠のうち道路予定地部分であったが、東側の現有道路まで、わずかであったため、東に拡張して調査を行なった。

ここからは、縄文時代後期初頭の称名寺式土器を伴う敷石住居跡と古墳時代、鬼高I期の土器を伴う竪穴住居跡が9軒検出された。

住居は地表より浅い所であったが、良く残っており、住居内の施設も確認できた。住居覆土層の最上部にFA層を新井房夫先生に確認していただいた。

西側は、59年度地区であり、同じ桑畠がつづき遺物の散布からも、集落が続いていることが予想される。

表4 九料遺跡標準土層図

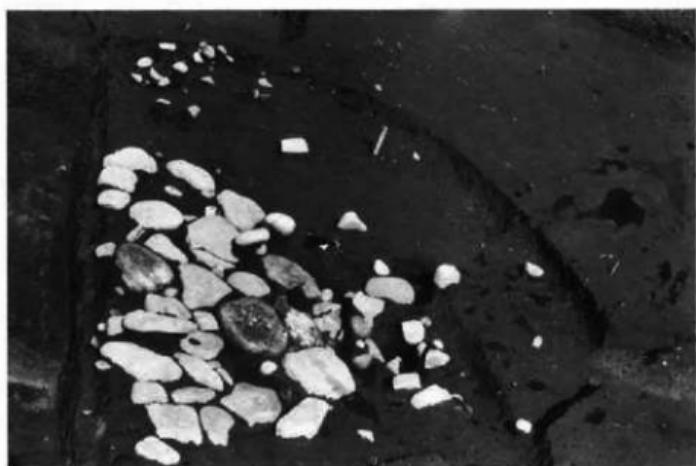


九料遺跡 全景

1	黒褐色土 (7.5YR3/2) 耕作土 A or B混入	20~ 25cm
2	黒褐色土 (10YR2/2)	10~ 15cm
3	黒褐色土 (10YR2/3) 下部はロームの影響がある	10~ 20cm
4	にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 50%以上のローム混土	10~ 20cm
5	明黄褐色土 (2.5Y6/6) 黄褐色土 (2.5Y5/4) 混土層になっている	10~ 20cm
6	黄色土 (2.5Y7/8) ローム、粘土	10~ 15cm
7	明黄褐色土 (2.5Y6/7) ローム、粘土	

縄文土器を伴う遺構

第15号住居跡



第15号住居跡 全景

遺跡やや北よりに所在するだ円形の敷石住居跡、南側約 $\frac{1}{2}$ を第8号住居跡に切られ、全体を検出することはできなかった。床面は、標準土層の第5層を切りこんで造られている。97個の石が中央やや東よりを中心として散かれており、南にも広がっていたようである。石の上面では、ほぼ平らである。石を取り去ったあの面は、中央が5cmほど低くなっている。柱穴、貯蔵穴、周溝は確認できなかった。覆土は三層を確認、いずれも粘性のあるよくしまった暗褐色土である。壁は平均23cmであり、なだらかで浅い検出状況だった。住居中央東よりの位置に炉状の甕みが検出された。しかし地盤や内部の石を見ると、灰、炭化物、焼土が少ないと、石があまり焼けていないことなど、炉とするのに疑問点がある。遺物は実測できる土器ではなく、すり石1点石器のフレ2点、搔器として使用したらしい石片2点など11点を含め、パン箱に1箱であった。土層、住居形態、遺物の文様から、縄文時代後期初頭の称名寺式の土器をもつ住居跡と判定した。

表5

住 居	項 目	内 容	炉	造り付け位置			炉らしいものが検出されて いるが、炉と断定するには、 疑問がある。
				長 さ	幅	主軸方位	
	主軸方位	N-10°-E (推定)					
	長 軸						
	短 軸						
	面 積	確定できない					

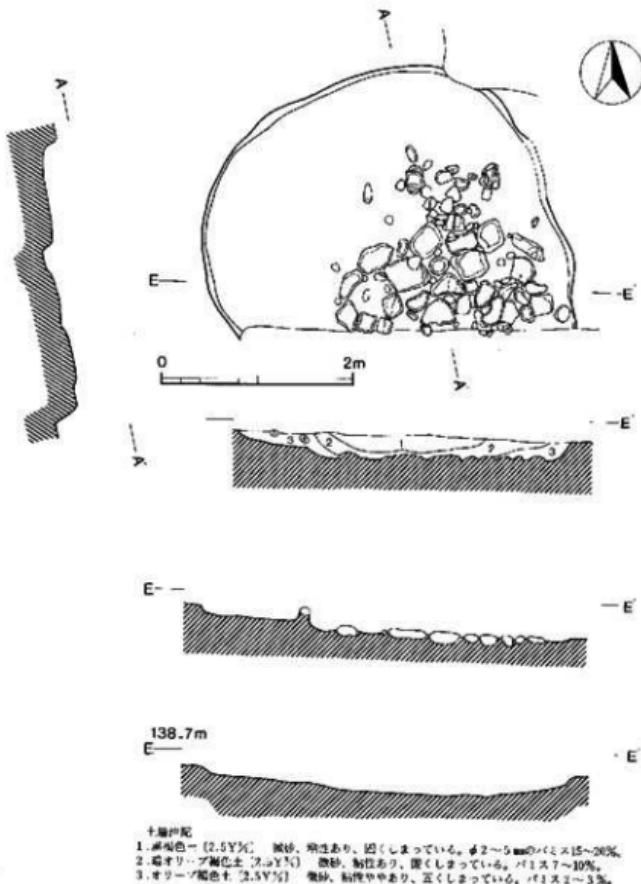


図10 第15号住居跡実測図

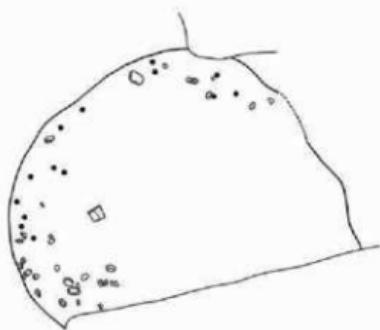


图11 第15号住居跡遺物分布図



图12 第15号住居跡遺物拓本



第15号住居跡 地断



第15号住居跡 石出し後

鬼高Ⅰ期の土器を伴う遺構

① 第3号住居跡



第3号住居跡 全景

遺跡最南端から検出された方形と思われる堅穴住居跡。調査区境上に位置し、全体の $\frac{1}{4}$ ほどを掘り出したのみである。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。北壁の一部のみ検出。壁高は平均で56cm。本来は60cmほどと推定。傾斜は平均80°である。しっかりした壁であるが、中央をP-22で切られていた。床面は平坦であるが、全体的にやわらかく、貼り床もなかった。柱穴、貯蔵穴、周溝、カマド等の施設は確認できなかった。覆土はレンズ状に堆積し、基本的には5層である。覆土中に二枚のテフラがあり、FAではないかと考え新井先生に見ていただいたが、ローム由来のものであった。上部のものには、FA由来の角閃石が少量存在している。覆土中のバミスの多くはCに由来するものである。このCは二次堆積のもので、良く保存されている。遺物は、覆土の壊の他、口縁のみの壺、甕4点、壺1点、底部のみの土師器である。石器も1点検出、他に石片が出土。遺物量は少なく、遺物、土層から鬼高Ⅰ期の住居跡と判定した。

表6

住 居	項 目	内 容	か ま ど	造り付け位置		かまどが検出されていない ため不明
				長 さ	幅	
	主軸方位					
	長 軸	完掘されていない				
	短 軸	ため不明				
	面 積					
			主軸方位 構 造			

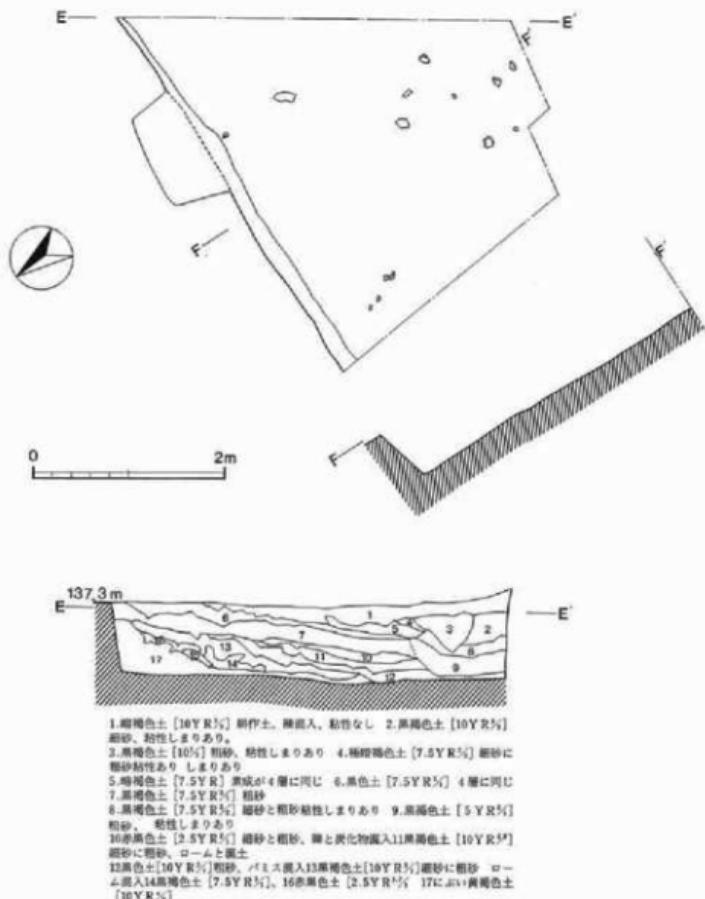


図13 第3号住居跡 実測図



第3号住居跡 遺物写真



第3号住居跡と重複のピット

② 第4号住居跡



第4号住居跡 全景

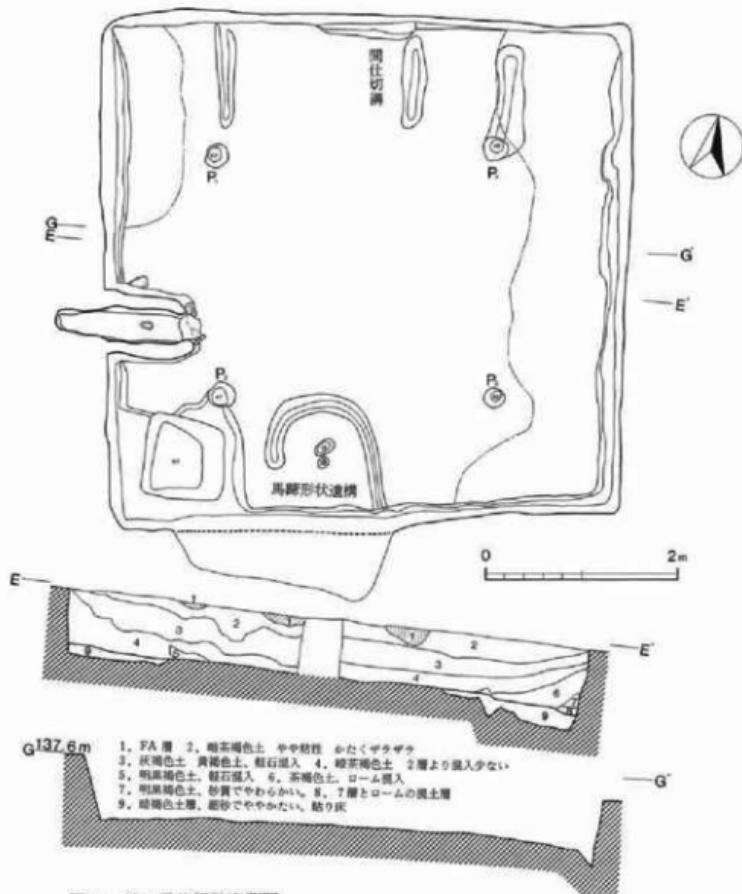


図14 第4号住居跡実測図



第4号住居跡 馬蹄形状遺構



第4号住居跡 カマド地断

遺跡南部に所在する正方形の堅穴住居跡。覆土は5層で最上部にFAを確認。壁高は平均61cm。平均80°の傾斜をもち、しっかりした形ではりこまれている。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。全体として平らで堅くふみしめられ、貼り床がある。南壁やや西に入り口施設と思われる遺構を検出。北に3つ並んだ間仕切溝と思われる溝も検出している。廻り方は東側が深くなっている。床面も比較的やわらかくなっていた。柱穴は4本で対角線上にある。貯蔵穴は住居南西隅でカマドの南、台形である。カマドは住居内壁やや南の位置、機乱を受けておらず良い残存状態であった。周溝は北壁の一部を除き、幅8~28cm、深さ2~10cmで全周。住居は南壁でピットと重複、上層などから住居跡の方が新しいと判定した。遺物は壺3、甕7、高坏1、坏3、瓶2、高台碗1などを出土、パン箱6。遺物などから鬼高I期のものと判定した。

表7

項目		内 容	
住居	主軸方位	N 98°-W	造り付け位置 住居西壁やや南 長 軸 1m52cm 幅 焼口で80m 短 軸 5.42m 主軸方位 N-93° W 面 積 約28.7m ² 構 造 地山の上に黒褐色土、粘土で 構築、上器片が入る
	長 軸	5.56m	
	短 軸	5.42m	
	面 積	約28.7m ²	

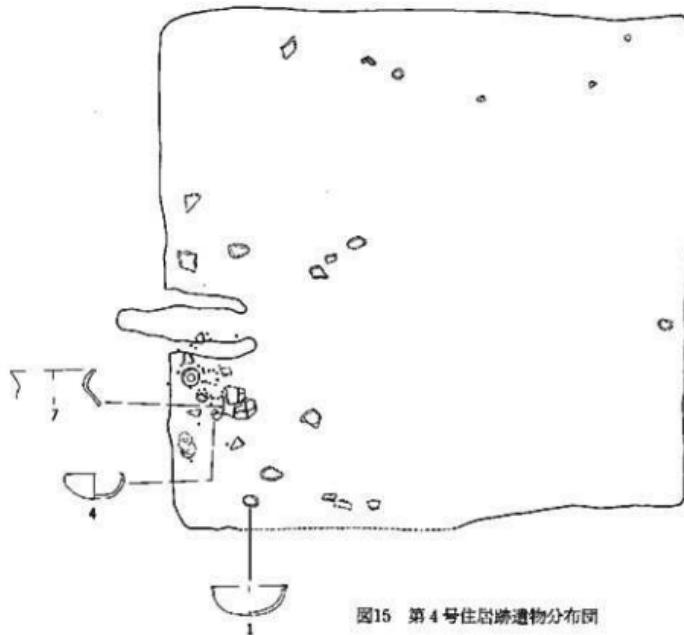


図15 第4号住居跡遺物分布図

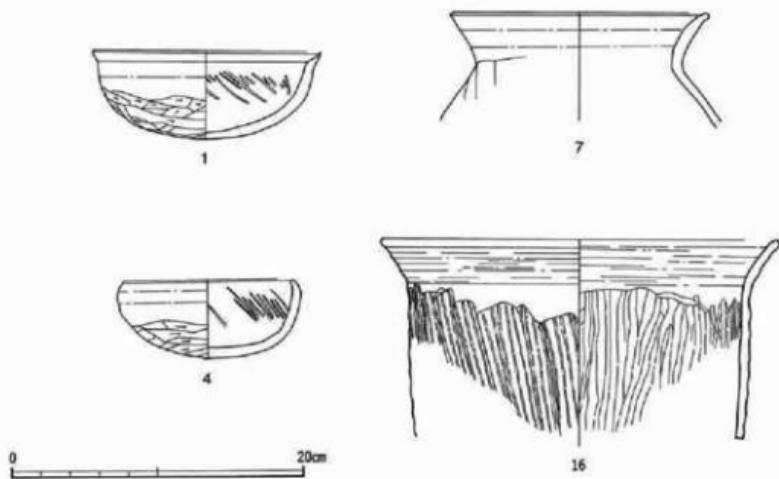


図16 第4号住居跡 遺物実測図

③ 第5号住居跡



第5号住居跡 全景

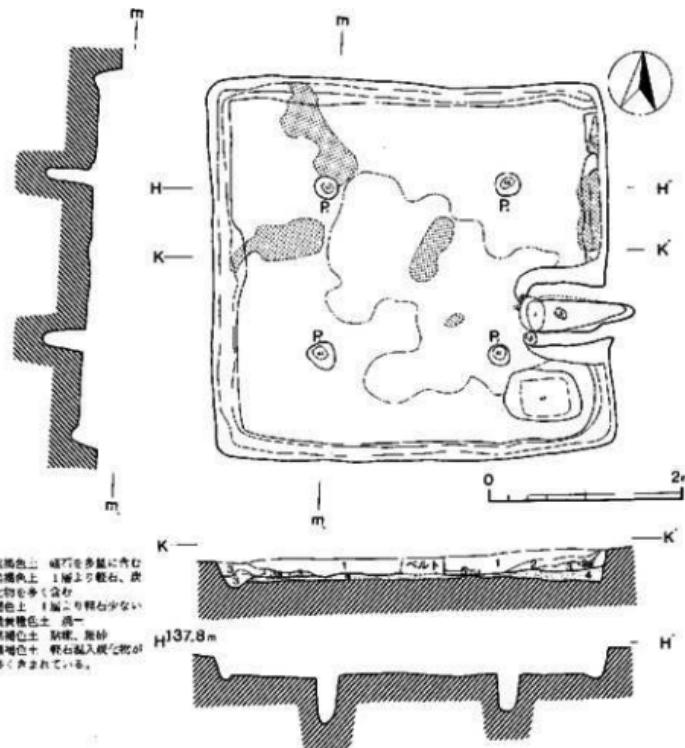
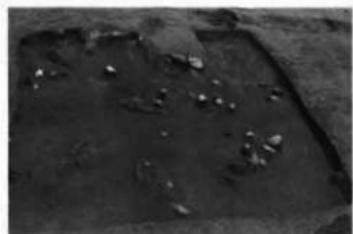


図17 第5号住居跡実測図

遺跡中央やや南に所在する、ほぼ正方形の堅穴住居跡。検出状況が浅いため、残存状況は良くない。覆土は浅く3層を確認、レンズ状に堆積している。床面直上に炭化材を検出、その上の層にも炭化物が多く含まれている。壁高は平均20cmを確認、60cmほどと推定。平均71°の傾斜をもつ。浅く残りは良くないが、四隅とも検出できた。床面は標準上層の第4層を切りこんで造られている。平坦であるが、南の方が4~5cmほど低くなっている。堅い面は中心とカマドのまわりに限られる。貼床あり。柱穴4本を検出、深さ45cmほどで円形とだ円形。貯蔵穴は住居南東隅でカマドの南の位置に長方形で、深さ47cmで検出。周溝がカマド部分と一部を除いて、幅9~27cm、深さは床面から3~7cmでまわっている。カマドは、住居東壁中央、やや南の位置、残りが良く、壺、壺が出土している。遺物は壺3、壺6の他砥石1などパン箱に1箱であった。遺物、住居形態、土層などから鬼高I期のものと判定した。

表8

住居	項目	内 容	か ま ど	造り付け位置 住居東壁中央やや南(1.8:1)	
				長 軸 4.25m	
	短 軸	4.02m		主軸方位 N-83°-E	
	面 積	17.15m ²		機 造 地山を掘り残し、黒褐色土、粘土で構築、安山岩使用	



第5号住居跡 遺物出土状況



第5号住居跡 カマド



図18 第5号住居跡 遺物分布図



第5号住居跡 カマド地断



第5号住居跡 カマド左袖

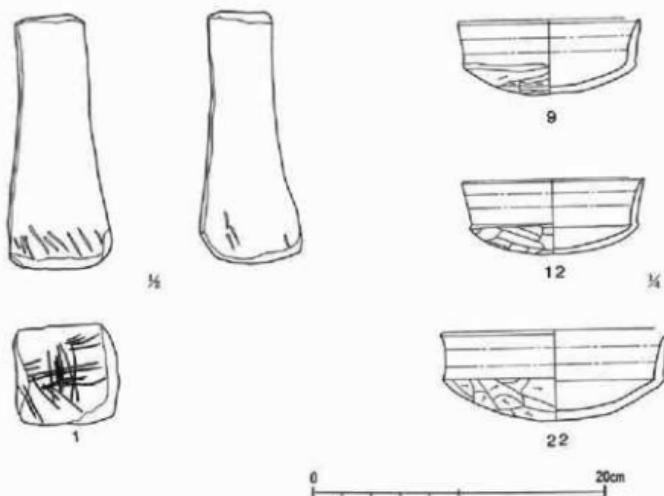
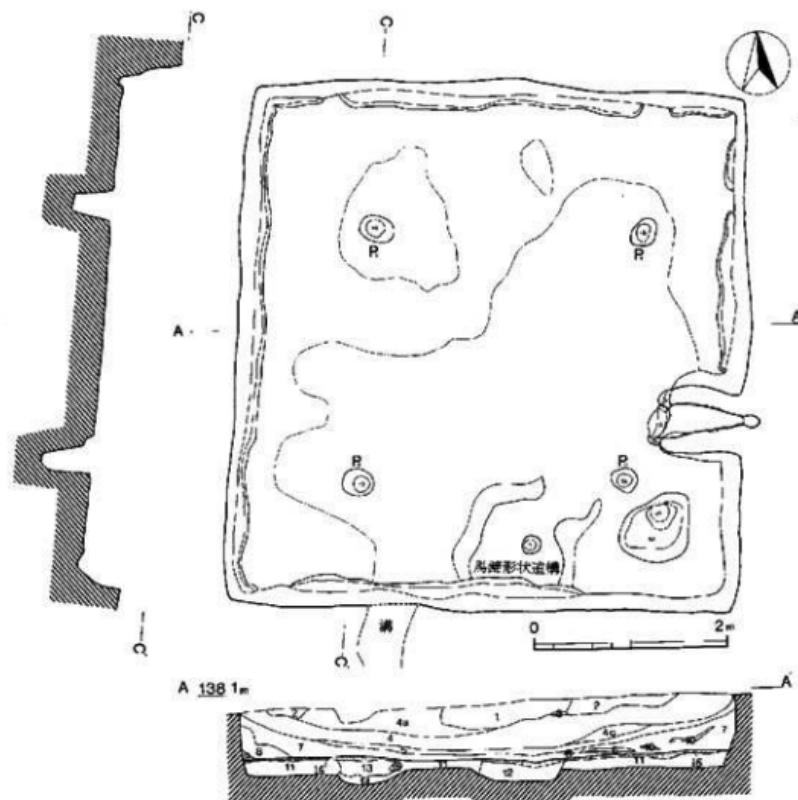


图19 第5号住居跡 遺物実測図

④ 第6号住居跡



第6号住居跡 全景



1. 黒褐色土、F-A透石含む2. 黒褐色土上、F-A含む3. 黄褐色土上、F-A層4. 黄褐色土、F-A含む
二層3. 黑褐色土、4層より細胞が少なくて4. 4層より下层がない5. オリーブ緑色土、灰を含む6.
赤褐色土、塊状を多く含む7. 黑褐色土、6層より粘性あり8. 黑褐色土、砂石多い9. 黑褐色土、
4層より黑褐色砂岩の侵入少し10. 黄褐色土、1層より黒い11. 黄褐色土、コーム地山12. によい黄
褐色土、4層に近い13. 明灰色土、粘土のローム14. によい黄褐色土15. 黑褐色土、砂利多く
16. オリーブ褐色土鉄鉱、瓦砾、かたくなっている。

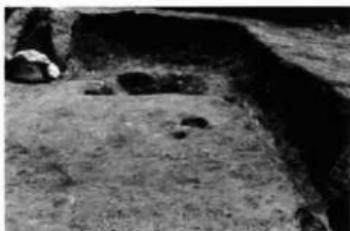
図20 第6号住居跡実測図

表9

住居	項目	内 容	か	造り付け位置
	主軸方位	N-97°-E	ま	住居東壁やや南(1.8:1)
	長 軸	5.62m	ま	長さ 116cm 幅 94cm
	短 軸	5.41m	ど	主軸方位 N-95°-E
	面 積	28.33m ²		構 造 地山の掘り残し、黒褐色土ロームと粘土で構築、安山岩使用



第6号住居跡 遺物出土状況



第6号住居跡 馬蹄形状遺構

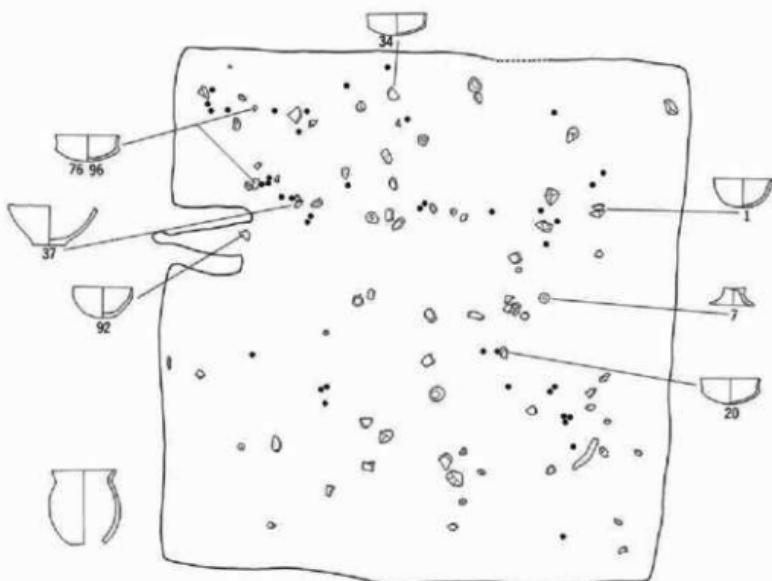


図21 第6号住居跡 遺物分布図

遺跡はほぼ中央に所在するほぼ正方形の堅穴住居跡、壁は四壁ともしっかりした形で検出された。南壁はB推積のW-5で、中央やや西を切られている。覆土は基本的に5層、最上部にFAを確認、レンズ状に推積している。壁高は平均52cm、平均73°の傾斜。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。全体的に平らで、中央部とP-1の周囲に堅い床がある。貼り床あり。柱穴4本を検出、だ円と円形で40~50cmの深さがある。周溝は幅15~30cmに、深さが床から1~4.5cmでカマド貯藏穴付近を除いて全周。貯藏穴はは南東隅でもマドの南に検出、上端は三角形で底部に円形のほりこみを持つ。深さ62cm。南壁近くに入り口施設と思われる遺構を検出。カマドから焼土が住居中央まで流出している。カマドは東壁中央やや南の位置に存在、残存状態は良好、袖

は地山を一部掘り残して造られていた。坏、瓶、甕を出土、遺物は甕4、高坏2、坏4、碗2の他、砥石1とコモ石のワレ1を出土、全体でパン箱に2箱であった。土層、住居カマドの形態、遺物から鬼高I期のものと判定した。



第6号住居跡 カマド地断



第6号住居跡 カマド左袖

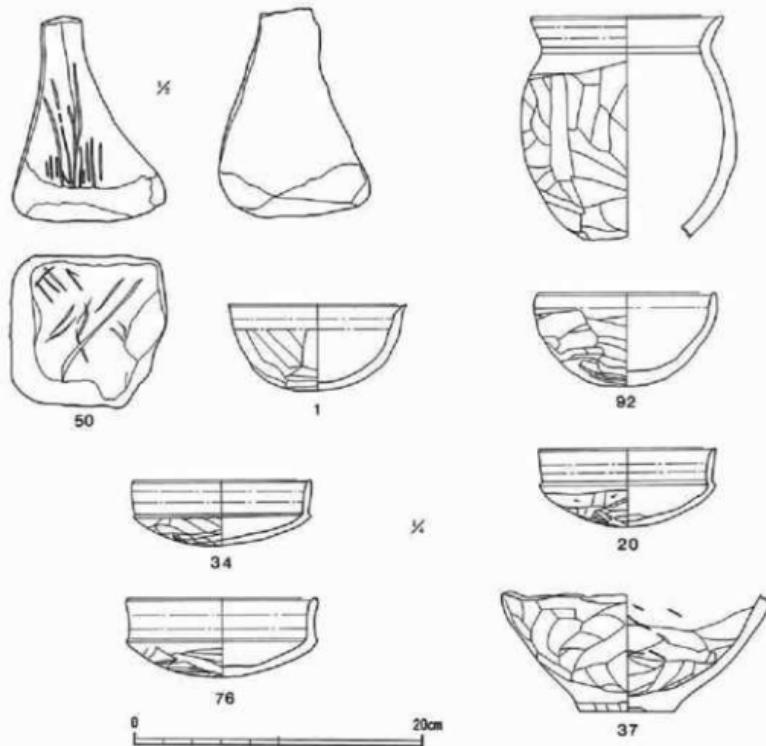


図22 第6号住居跡遺物実測図

⑤ 第7号住居跡



第7号住居跡 全景

遺跡中央やや北、調査区境上に所在する不整四辺形の竪穴住居跡、平行四辺形に近い形をもつ。調査区東の現有道路にかかるため完掘はできず、部分的に掘りすすめて規模を推定した。覆土は3層を確認、いずれも黒色、黒褐色の粗砂層で、南西から次第に堆積していったようである。床面は、一部に黒褐色土をはり、貼床としている。北東隅に落ちこみ部分を検出している。柱穴、貯蔵穴、周溝は、いずれも確認できなかった。壁高は平均25cmほどで、北壁の方がはっきりと検出された。平均傾斜は、71°である。床面中央やや東と、北壁やや東に焼土の散布が見られた。北壁のものは、床面上に焼土が堆積したものであり、中央のものは、深さ4cmに焼土と灰層が堆積した地床炉であった。遺物量は、壺1、くぼみ石1を含め、パン箱1である。土器から、鬼高I期のものと考えられるが、住居規模、炉を持つことなどを考えあわせると、この住居跡は、他の鬼高I期の住居跡より、やや古いもので、同時期には、存在していなかったのではないかと考えられる。

表10

住 居	項 目	内 容	炉		
	主軸方位	N-104°-E		造り付け位置 住居中央やや東	
	長 軸	3.57m		長さ 65cm	幅 27cm
	短 軸	2.61m		主軸方位 N-82°-E	
	面 積	確定できなかった		構 造 地床炉	

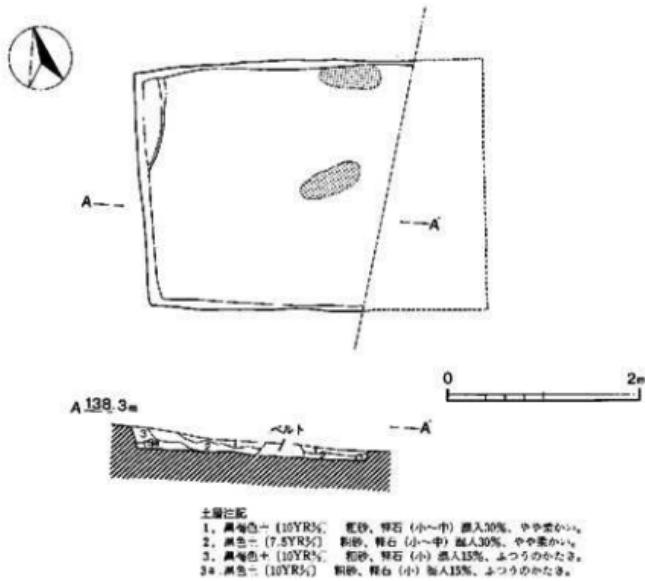


図23 第7号住居跡発掘調査遺物分布図

⑥ 第8号住居跡



第8号住居跡 全景

遺跡北部のほぼ正方形の堅穴住居跡。四壁とも、しっかりした形で検出された。壁高は平均55cmで、60cmくらいあったと推定、平均傾斜は78°。覆土は12層に分けられ、最上部にFA層、3層目に礫層が存在している。床面は、標準土層の第4層を切りこんで造られている。全体的に平坦である。ピット1の周囲に石の塞みがある他、入り口施設と思われる遺構の付近は2~5cm高くなっている。堅い床は、ほぼ全面にわたっている。柱穴4本を検出、だ円と円形で深さは25~50cm。貯蔵穴は南東隅でだ円で深さ49cmであり、南辺にテラス状のものがつく。周溝は南隅と北壁の中央部に幅8~10cm、深さ3~10cmであるのみ。貼り床は全体にわたり3~10cmで敷かれている。カマドは、東壁中央南よりに造られている。右袖部に甕が検出、構架材として用いられていたものと思われる。遺物量は、多く、壺5、壺19、壺1、壺12、壺1、碗4、鉢1の他、くぼみ石4、たたき石1、石斧1を含めてパン箱に7箱である。土居、住居、カマドの形態、遺物から、鬼高I期のものと判定した。

表11

項目		内 容		か ま ど	造り付け位置 住居東壁やや南(1.5:1) 長さ 139cm 幅 107cm 主軸方位 N-97-E 構 造 地山を掘りこみ、ロームによ り構築
住	居	主軸方位	長 軸		
	主軸方位	N-94°-E			
	長 軸	5.34m			
	短 軸	5.15m			
	面 積	25.00m ²			



第7号住居跡 地断



第7号住居跡 炉掘り方

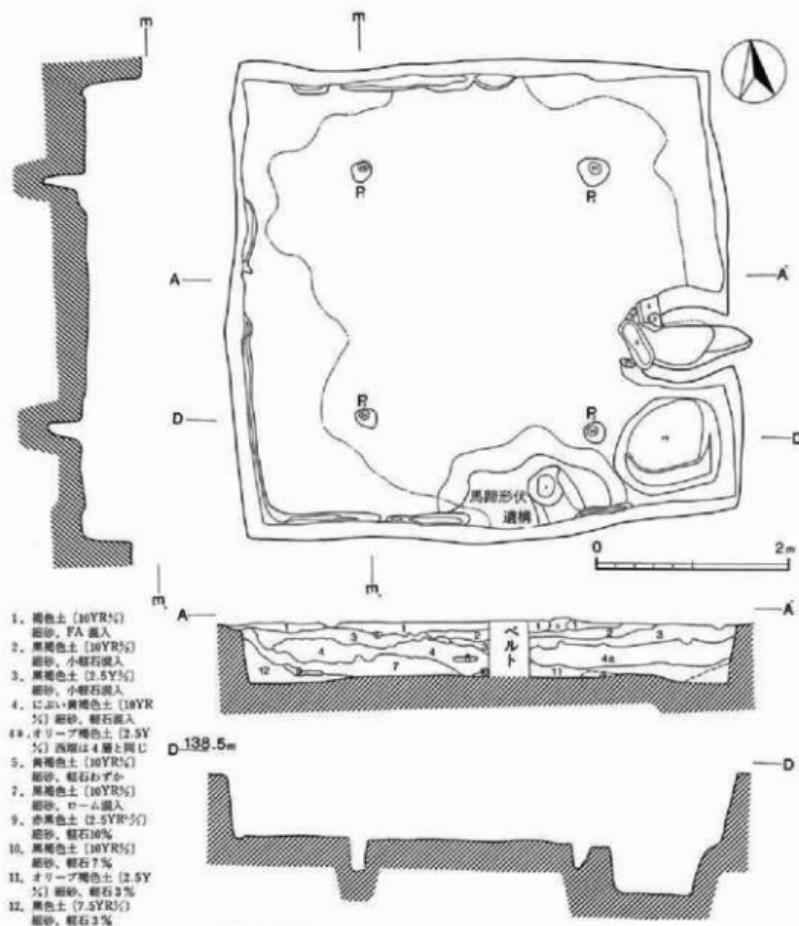
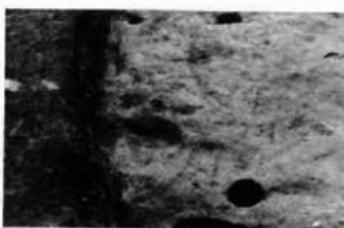


図24 第8号住居跡実測図



第8号住居跡 遺物出土状況



第8号住居跡 馬蹄形状遺構

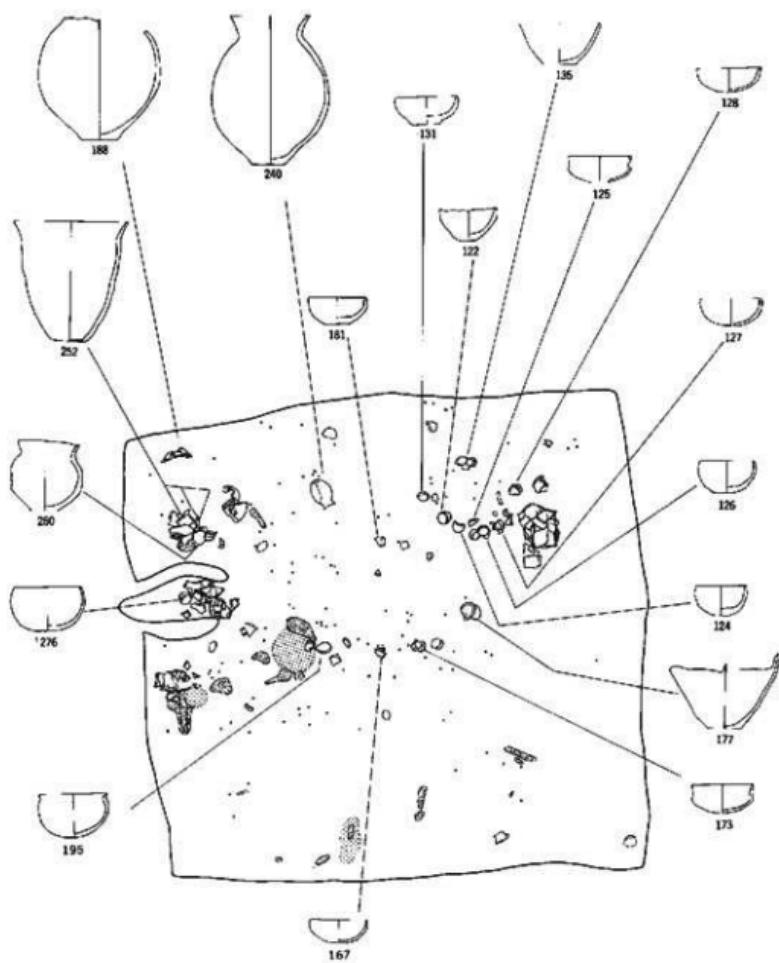


图25 第8号住居跡遺物分布区

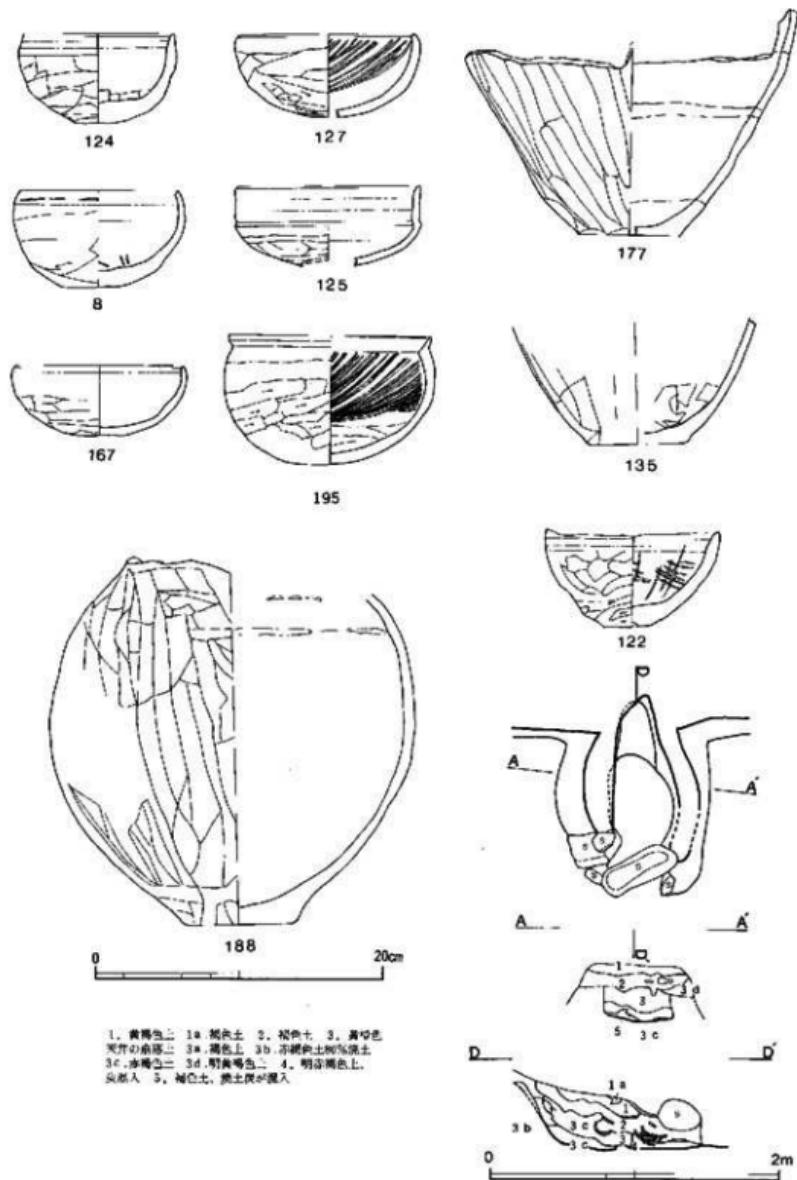


図26 第8号住居跡遺物及びカマド実測図

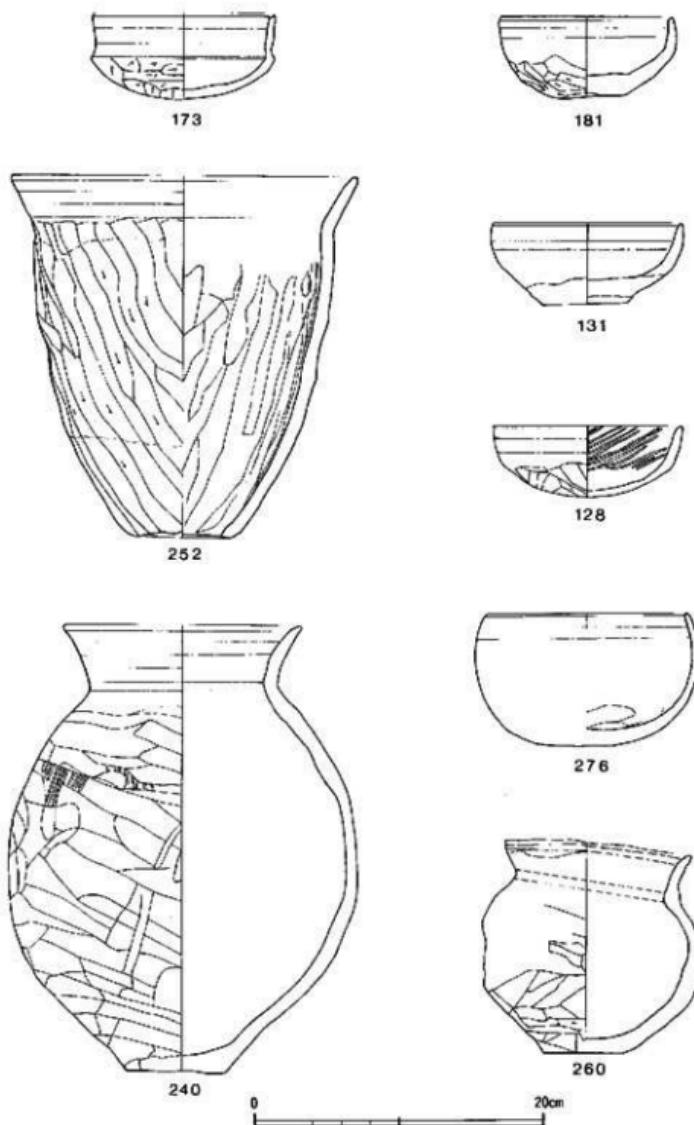


图27 第8号填土层遗物实测图

⑦ 第9号住居跡



第9号住居跡 全景

遺跡北端で一部が調査区境にかかる不整方形の竪穴住居跡。調査区境のため北西部、北壁の一部を完掘できなかった。壁はしっかりと切りこんであり、平均75°である。壁高は平均52cm。65cmほどあったと推定した。覆土層は8層、最上部にFA層を確認、レンズ状に堆積していた。遺物が、床面直上の他、覆土中からも非常に多く出土し、出土点数だけで1008を数えた。床面は、標準土層の第4層を切りこんで造られている。全体として平坦だが、ピットにかこまれた中央部が堅く、やや高くなっている。南壁に入り口施設と思われる遺構を検出。柱穴4本、円形とだ円で深さ40~60cm、貯蔵穴は方形で深さ60cm、周溝はカマドの周囲を除き、幅20~30cm深さ1~5cmで、とぎれながらも全周していると推定、厚さ5~8cmほどで貼り床をしている。カマドは、東壁南よりに所在、残存状況は良い。遺物は、床面直上、30cm上、60cm上の3グループとして存在、合計で壺14、甕19、高环3、环70、瓶1、碗3、覆土の須恵、紡錘車を含め、パン箱で11箱であった。ピット1には柱が炭化して残っていた。遺物、形態等から、鬼高I期の住居跡と判定した。

表12

住 居	項目		か ま ど	内 容	
	主軸方位	N-111°-E		造り付け位置	住居東壁南より(2:1)
	長 軸	6.77m	ま	長さ	1.25m 幅 0.83m
	短 軸	6.65m	ど	主軸方位	N-120°-E
	面 積	約41.5m ²		構 造	貼り床上に黒褐色土、粘土で構築

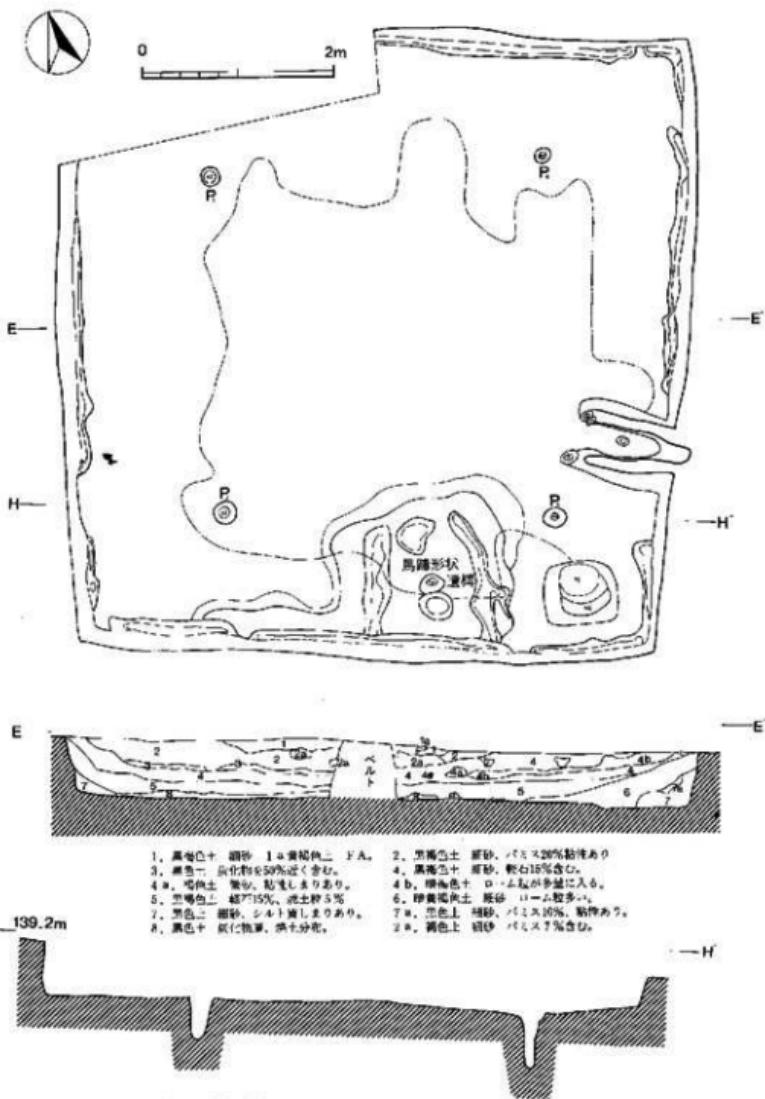


図28 第9号住居跡実測図

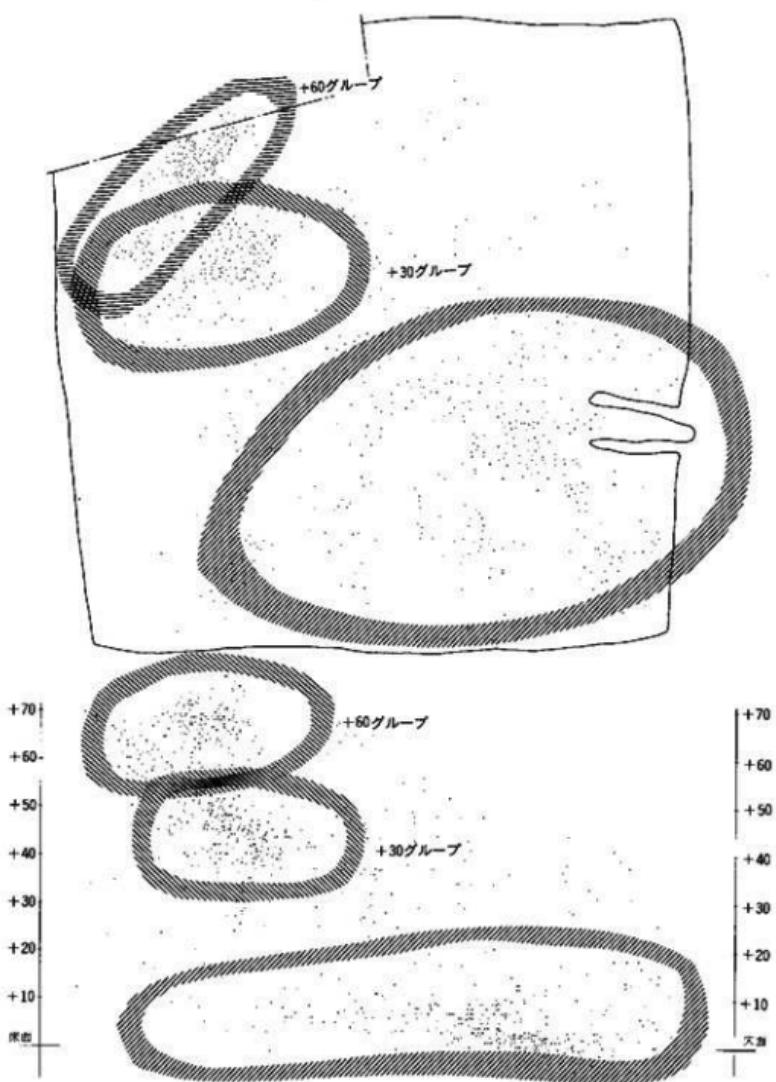


図29 第9号住居跡 遺物分布図

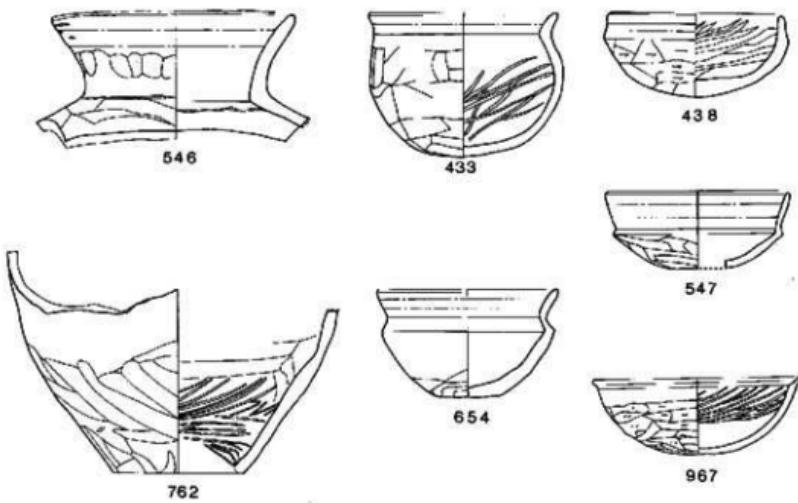


图30 第9号住居跡床面上遺物実測図

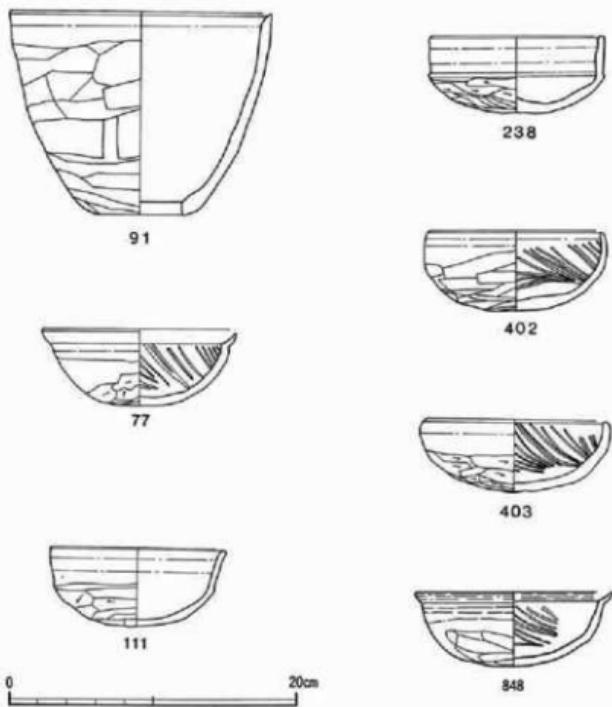
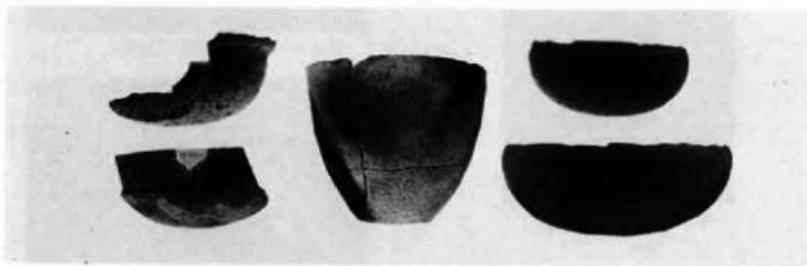


图31 第9号住居跡床面+30cm遺物実測図



第9号住居跡 床面+30遺物写真

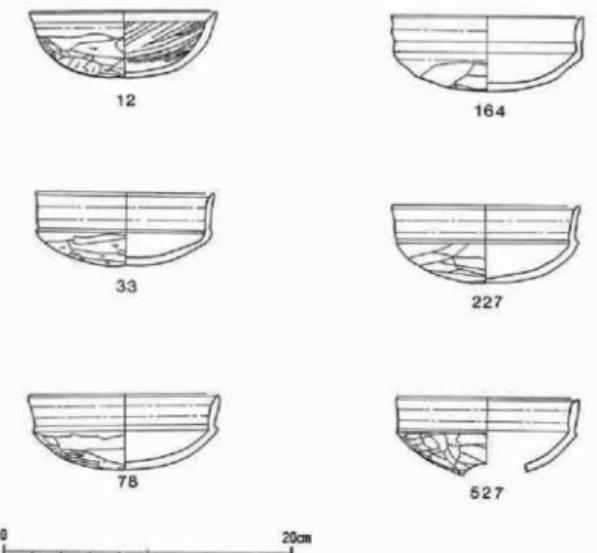


图32 第9号住居跡床面+60cm遺物実測図



第9号住居跡 カマド

第9号住居跡 馬蹄形状遺構



第9号住居跡 カマド地断

⑧ 第10号住居跡

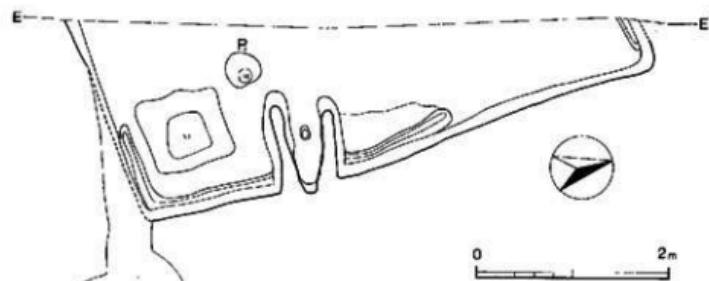


第10号住居跡 全景

遺跡南部西側の調査区境内に所在した竪穴住居跡、住居の大部分が、調査区外に存在し、東壁とカマド、貯蔵穴の他は、北壁南壁、柱穴の一部を検出するにとどまった。壁は、東壁はしっかりと形で出たが、北の方はやわらかく、カマ掘りによってくずされていた。壁高は平均50cmであり、60cmほどあったと推定した。傾斜は平均80°である。覆土は、耕作土を含めて9層、FAがわずかに混入している可能性がある。レンズ状に堆積をしている。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。全体として平坦で中央部付近は堅くふみしめられている。柱穴は南東の1本を検出、円形で深さ40cm、貯蔵穴も南東隅、カマドの南に開口、方形で深さ53cmである。周溝は、かまどの周囲と北壁、南壁で検出、幅10~16cm、深さ2~5cmで、カマドの下までまわっていた。カマドは、東壁南よりの位置に所在、煙道をわずかに住居外に造り出している。遺物は、高壙1、壙4、穀1の他、搔器が覆土中から出ている。遺物量はパン箱2箱、遺物、覆土、住居、カマドの形態から、鬼高I期のものと判定した。

表13

住 居	項目		か ま ど	内 容		
	主軸方位	不 明		造り付け位置	住居東壁南より(2.2:1)	
	長 軸	南北軸のみ5.76m と測定		長さ 1.15m	幅 0.8m	
	短 軸			主軸方位 N-96°-E		
	面 積	不 明		構 造 地山を掘り黒褐色土、粘土で 構築、土器片が入る		



土層記号
 1.黒褐色土「10YR 5/2」 粗砂と2~3%の砂、AとBを含むと思われる耕作土
 2.黒褐色土「10YR 5/2」 粗砂、粘性があり、まれに4cmの大粒石、2~3%の
 バーミクシス7%
 3.所相鉢土「7.5Y R 3/2」 粗砂と2~3%の砂、しまっている。粘性なし、5%
 の粗粒石が15~20%
 3a. 黒褐色土「10YR 5/2」 粗砂、粘性あり、ややしまっている。2~3%大
 のバーミクシス7%
 4.黒褐色土「10YR 5/2」 粗砂、粘性ややありしまり少し。コーム混入
 5.黒褐色土「7.5Y R 3/2」 粗砂、粘性あり、しまりあり
 6.黒褐色土「10YR 5/2」 粗砂、ややしまっている。粘性あり
 7.黑色土「7.5Y R 3/2」 粗砂、粘性あり。しまっている。2~3%大のバーミ
 クシス10~15%含む
 8.黒褐色土「2.5Y 5/2」 粗砂、粘性あり。しまっている。2~3%のバーミクシス
 を10~15%含む
 9.黒褐色土「10Y R 5/2」 粗砂、粘性あり。しまっている。コームを5~10%含む

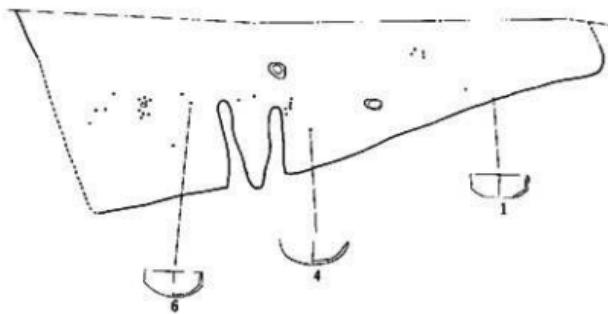


図33 第10号住居跡 実測図 遺物分布図



第10号住居跡 カマド



第10号住居跡 カマド左袖

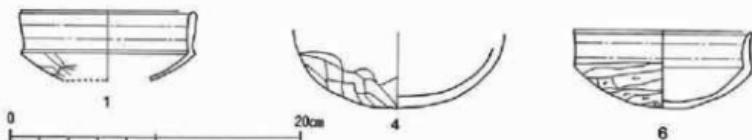


図34 第10号住居跡 遺物実測図



第10号住居跡 遺物写真



第10号住居跡 カマド付近



第10号住居跡 地断

⑨ 第14号住居跡



第14号住居跡 全景

遺跡中央西側調査区境内に所在する長方形と推定される竪穴住居跡。西側が調査区外で、発掘できなかつたため、全様をつかむことはできなかつた。壁は、はつきりした形で検出された。平均33cmを確認したが、カマドが未検出のこともあり、元の高さは推定できなかつた。傾斜は平均65°である。覆土は5層、最上層はFAの灰層で2層目はFAの軽石層、3層にも純粹ではないがFAが混入している。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。平坦であるが、住居中央を境にして、9~10cmの段差がある。堅い床面が中央部にある。また中央にはピットが開口している。柱穴4本を検出、円形、だ円で深さ26~46cm。貯蔵穴は住居南壁中央やや西に方形、深さ72cmで開口、すぐ西にカマドの存在が予想される。周溝は検出されなかつた。遺物は、壺1、甕2、壺4、瓶1の、石斧1を含みパン箱で2箱であった。土層、遺物、住居形態から鬼高Ⅰ期のものと判定した。床面には、10cmほど貼り床が造られ、北の高い方、南の低い方、それぞれに存在していることからも段差があるまま使われていたと思われる。

表14

住 居	項 目	内 容	か ま ど		
				造り付け位置	検出されていないため不明
	主軸方位	N-11'-E (推定)		長さ	
	長 軸			幅	
	短 軸	未完掘のため確定 できない。		主軸方位	
	面 積			構 造	

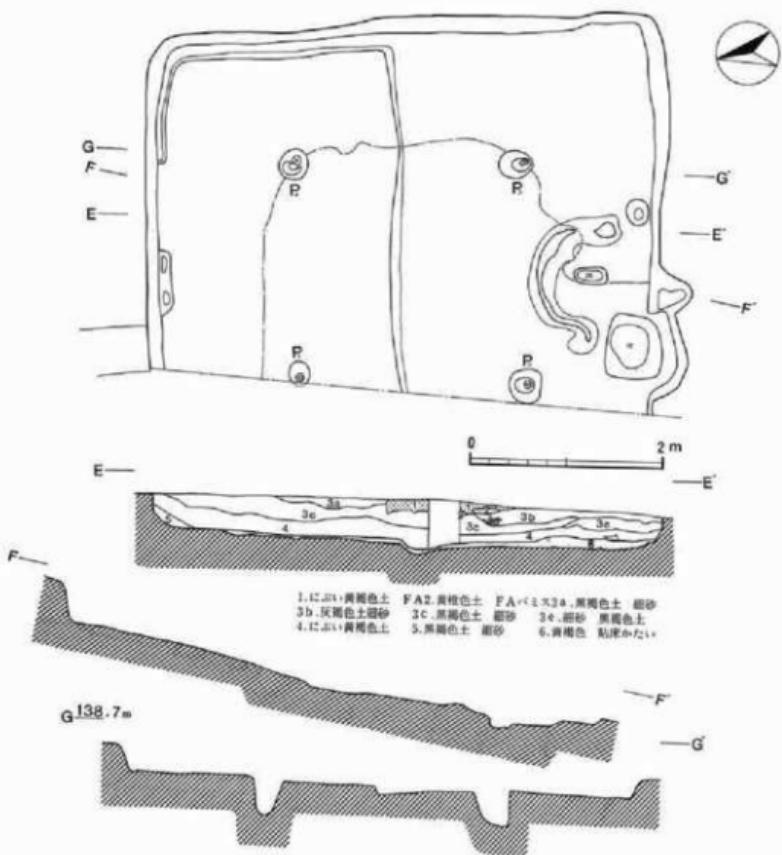
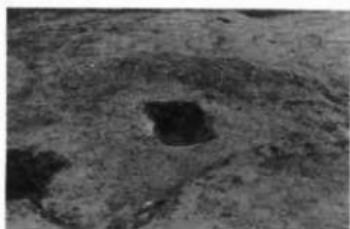


図35 第14号住居跡 実測図



第14号住居跡 遺物出土状況



第14号住居跡 馬蹄形状遺構

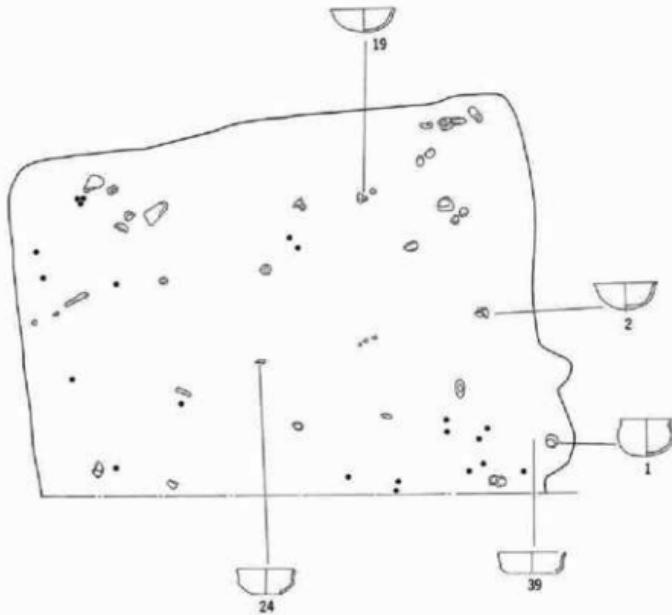


图36 第14号住居跡遺物分布図



第14号住居跡 地断



遺跡 土層写真

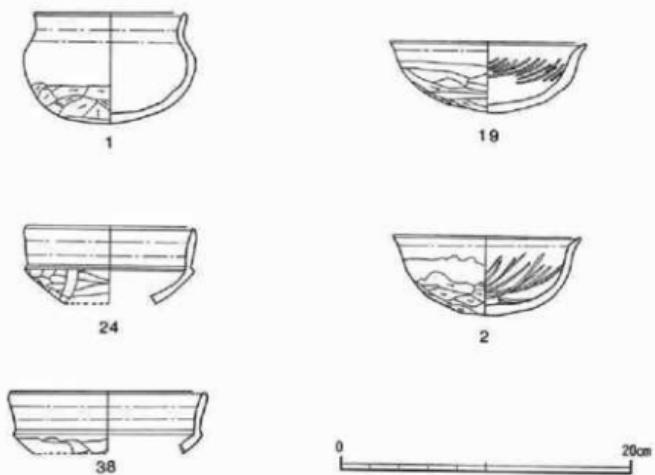


図37 第14号住居跡遺物実測図

その他の遺構

遺跡中央部をなめに横切る溝が検出された。

この溝は、浅間B軽石の純層が堆積しており、第6号住居跡と、第14号住居跡を切っていた。

ピットは9基検出された。ピット22は第3号住居跡北側に重複して存在、ピットの方が新しい。ピット23はピット22の北に存在、底部から鬼高期の遺物が検出された。ピット24は、第4号住居跡と重複、土層などから、ピットの方が古く、住居に切られていると判定した。ピット25は、第4号住居跡の北に存在、鬼高期の遺物と石匙が出土。ピット26は、第9号住居跡の貯蔵穴と重複しており、ピットの方が古いと判定した。ピット27~30は、遺跡の北、第8号住居跡と第9号住居跡の間に存在し、鬼高期の遺物が出土している。

いずれのピットも、方形と円形のやや大きいもので、1m~1.5mの大きさをもつものである。



溝 5号

ま　と　め

本遺跡からは、鬼高Ⅰ期の住居が良好な状態で検出できた。

検出した住居跡10軒中、調査区境のため、完掘できなかった住居跡が5軒でてしまったが、住居内施設が整った形で検出でき、貴重な資料として記録ができ、成果をあげられた。

かまど、柱穴、貯蔵穴、入り口施設と思われる馬蹄形状遺構、間仕切溝、貼り床等が、しっかりした形で検出できている。

住居跡のうち、4号、8号、9号、14号住居跡からは、覆上最上部にFA層の堆積が見られた。遺構プラン検出段階で、遺構プラン検出段階で、遺構中央部分に集まって見えたことや、地断から見ても、住居が覆上におおわれて、わずかに窪みが残っていた頃、堆積したものと考えられ、土器から考えられる年代と一致する。

かまどは、検出できた住居では、同じ築造法をとっている。安山岩を袖石、天井石、支柱に使い、地山をややほりこみ、黒色土をしいた上に、粘土で袖が造ってあった。

袖の中に土器の破片を入れて、補強材としてあるかまども存在した。

ほぼ住居内に1mほど、住居外に30cmほどの規模であり、土がよく焼けている様子から、使いこまれた様子がわかった。

入り口施設と思われる馬蹄形状遺構は、4号、6号、8号、9号、14号住居跡より検出、いずれも、住居跡南壁、ややカマドよりの位置であった。

貼り床は、4号、5号、6号、8号、9号、14号住居跡より検出されている。地山まで6~10cmほどの厚さがあり、住居中央部は、非常に堅く踏みしめられた床面となっており、たたくと、金属的な音がするほどであった。

間仕切溝は、第4号住居跡より検出された。やや規模が大きいためもあるかもしれない。

周溝は、4号、5号、6号、8号、9号から検出され、ほぼ全周する。10号のみ、カマドの下までまわっていた。

柱穴は、40~60cmほどの深さで検出され、特に第9号住居跡からは、柱に使われた木が炭化した状態で検出されている。

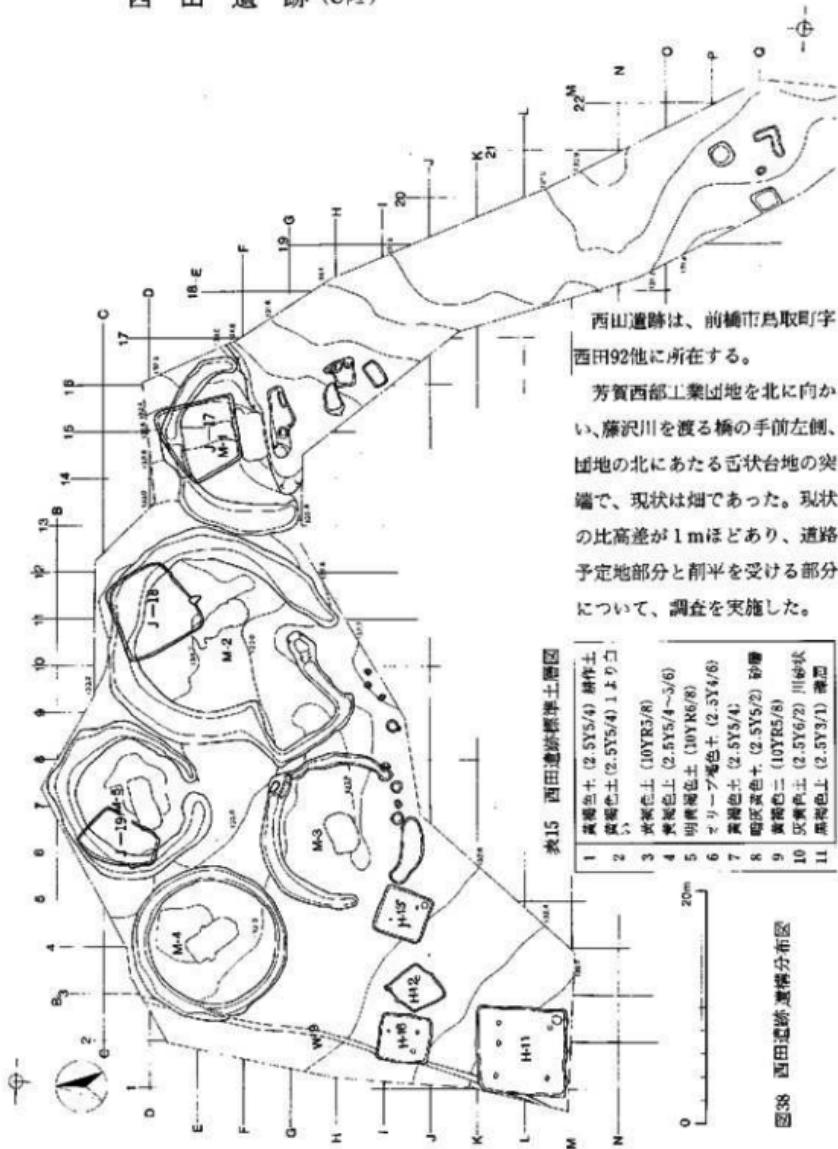
貯蔵穴は、カマドの隣に存在し、40~80cmの深さをもち、しっかりした形で造られている。

鬼高Ⅰ期の住居のうち、第7号住居跡は、遺物から鬼高Ⅰ期のものと判定したが、炉の存在、規模から考え、鬼高Ⅰ期でも最も古いものと考えられる。

遺物は、ほとんどの住居で床面から検出されているが、8号、9号からは、覆土中からも完形に近いものが出土しており、廃棄の場所になったとも考えられる。

遺跡地西側は、同じ桑畑が続いており、遺物が濃密に散布していることから、この集落が広がっていることが、充分予想される。

西田遺跡(C区)



西山遺跡は、前橋市鳥取町字西田92他に所在する。

芳賀西部工業団地を北に向かい、藤沢川を渡る橋の手前左側、団地の北にあたる舌状台地の突端で、現状は畑であった。現状の比高差が1mほどあり、道路予定地部分と削平を受ける部分について、調査を実施した。

縄文式土器を伴う遺構

① 第17号住居跡



第17号住居跡 全景

遺跡東端、西田1号墳の墳丘下北側より検出された縄文式土器を伴う不整長方形の竪穴住居跡。墳丘を造る際破壊を受けており、表採の土器と古墳周囲北側より出土の土器から存在を予想した。北壁が比較的残っているが、それもで壁高が10~23cmほどで他は5~8cmという残存状態であった。傾斜は平均で61°である。土層はわずかに二層を検出、上は細砂の褐色土、下は地山が混入したものである。床面は標準土層の第6層を切って造られている。平坦であるが、南東に向けて低くなっている。貼り床はなかった。柱穴、貯蔵穴、周溝は、いずれも検出できなかった。炉の存在も予想されたが、焼土も検出されなかった。遺物は、深鉢の一部の他は、破片のみである。石片が30点ほど出土しており、石斧、石棒、搔器などで、遺物量は全体でパン箱1箱であった。土器の文様から、縄文時代前期前葉の関山式期のものと判定した。

表16

住 居	項目		内 容	炉	造り付け位置	検出されていないため不明
	主軸方位	N-35°-W				
	長 軸	6.95m			長さ	
	短 軸	6.44m			幅	
	面 積	35.46m ²			主軸方位	
					構 造	

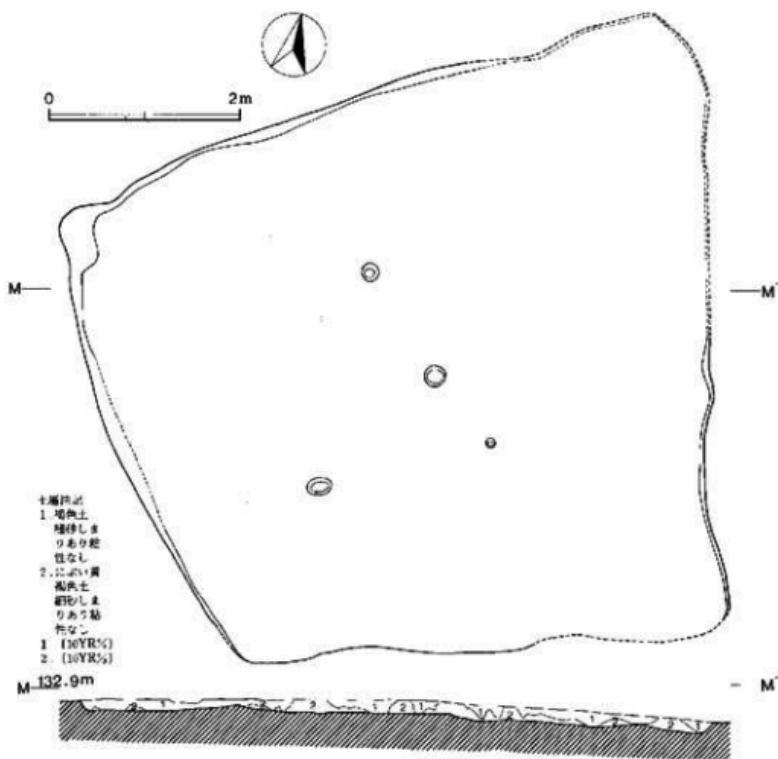


図39 第17号住居跡実測図

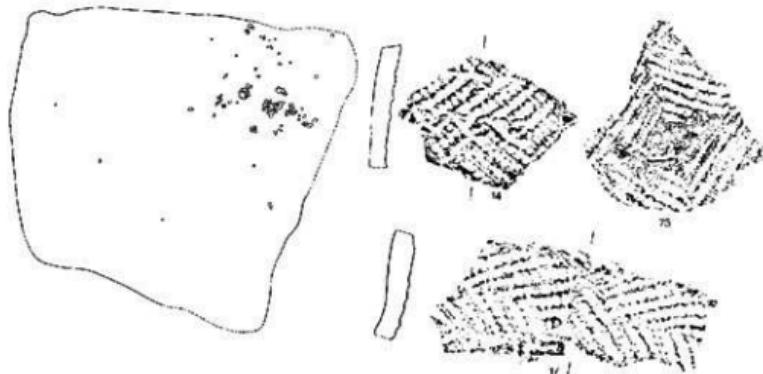


図40 第17号住居跡 遺物分布図

② 第18号住居跡



第18号住居跡 全景

遺跡中央やや東、西田2号墳主体部東側下より検出された縄文式土器を伴う不整長方形の堅穴住居跡。第17号住居跡と同じく、土器の出土の様子から、住居の存在を予想した。四壁の長さがすべて異なっている。第17号住居跡と同じく、古墳築造時、破壊を受けており、残存状態は良くない。壁高も8~30cmと巾があり、傾斜は平均68°である。床面は、標準土層の第7層を切りこんで造られている。東西には平坦だが、北に向かって高くなってしまい、20cmほどの差がある。住居内にピット10基を検出しておらず、住穴、貯蔵穴、炉などにあたると思われたが、いずれも確認できなかった。周溝も検出されていない。覆土は2層を確認、上下とも、ほぼ同じ細砂の黄褐色土層である。貼り床は検出されなかった。遺物は、全体としてパン箱1箱という量であるが、土器の中に実測可能なものはない。石片の中には、石斧、石匙、削器など、他の縄文住居跡より多くの出土があった。土器の文様から、縄文時代、前期前葉の関山式期のものと判定した。

表17

住 居	項目	内 容	炉	造り付け位置		検出されていないため不明
				長 軸	幅	
	主軸方位	N-7°-E				
	長 軸	7.20m				
	短 軸	6.83m				
	面 積	41.98m ²				
			構 造			

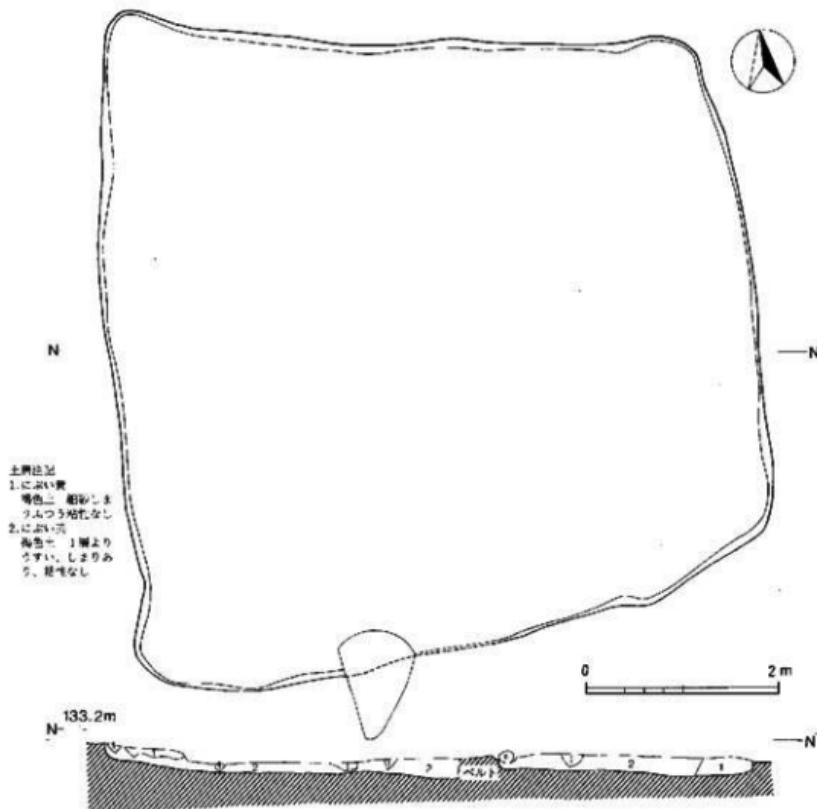


図41 第18号住居跡 実測図

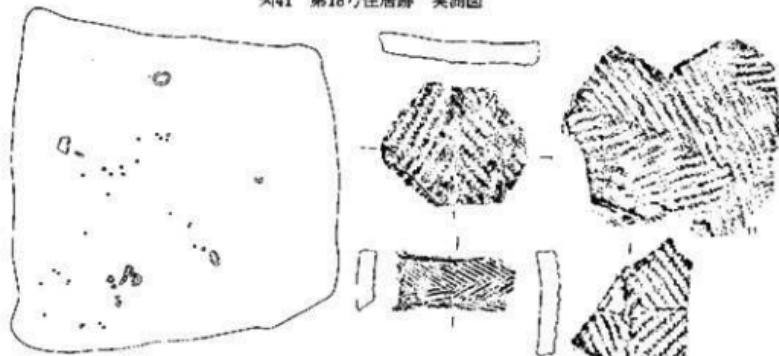


図42 第18号住居跡遺物分布図

③ 第19号住居跡



第19号住居跡 全景

遺跡中央西より北端に所在する不整形の繩文土器を伴う竪穴住居跡、西田5号墳の主体部下から北上にかけて存在し、墳丘築造に際し破壊を受けており、残存状態は良くない。17、18号住居にくらべて深く残っていたが、それでも確認壁高は27cmである。傾斜は平均して60°である。あまりなめらかではない。床面は標準土層の第7層を切りこんで造られている。ややでこぼこがあり、北西に向かって低くなっている。柱穴、貯蔵穴、周溝は確認できなかった。検出したピットの中に焼土を確認したが、焼土量が少ないと、灰、炭化物がほとんど検出されないことなどから、炉と断定するには到らなかった。遺物は、床面に広くちらばって割合多く出土したが、破片のみで、実測可能な大きさまで復元できたものはなかった。石片は、搔器、礫器と見られるものなど15点であり、土器を含めた遺物量は、パン箱1箱である。遺物文様、住居形態から、繩文時代前期前葉の関山式期のものと判定した。

表18

住 居	項 目	内 容	炉	造り付け位置			
				長 さ	幅	主軸方位	構 造
	主軸方位	N-27°-W					
	長 軸	6.66m					
	短 軸	4.47m					
	面 積	22.69m ²					
							検出されていないため不明

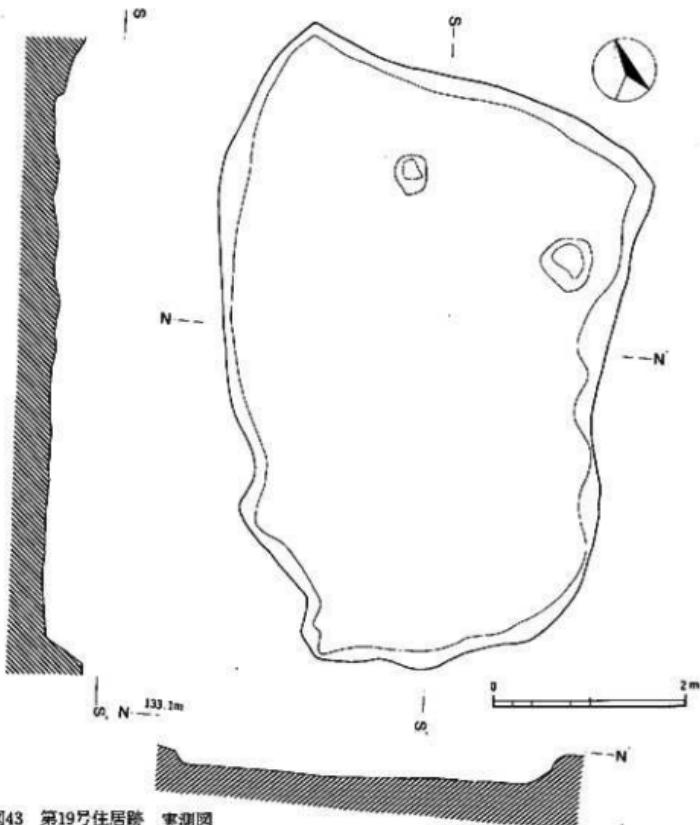


图43 第19号住居跡 実測図

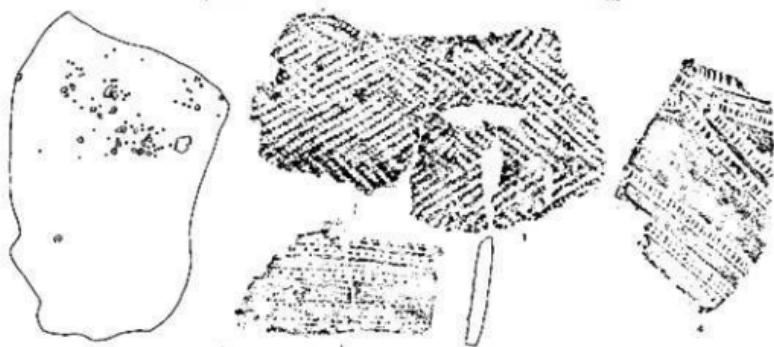


图44 第19号住居跡遺物分布図、遺物拓本

和泉期の遺物を伴う遺構

① 第11号住居跡

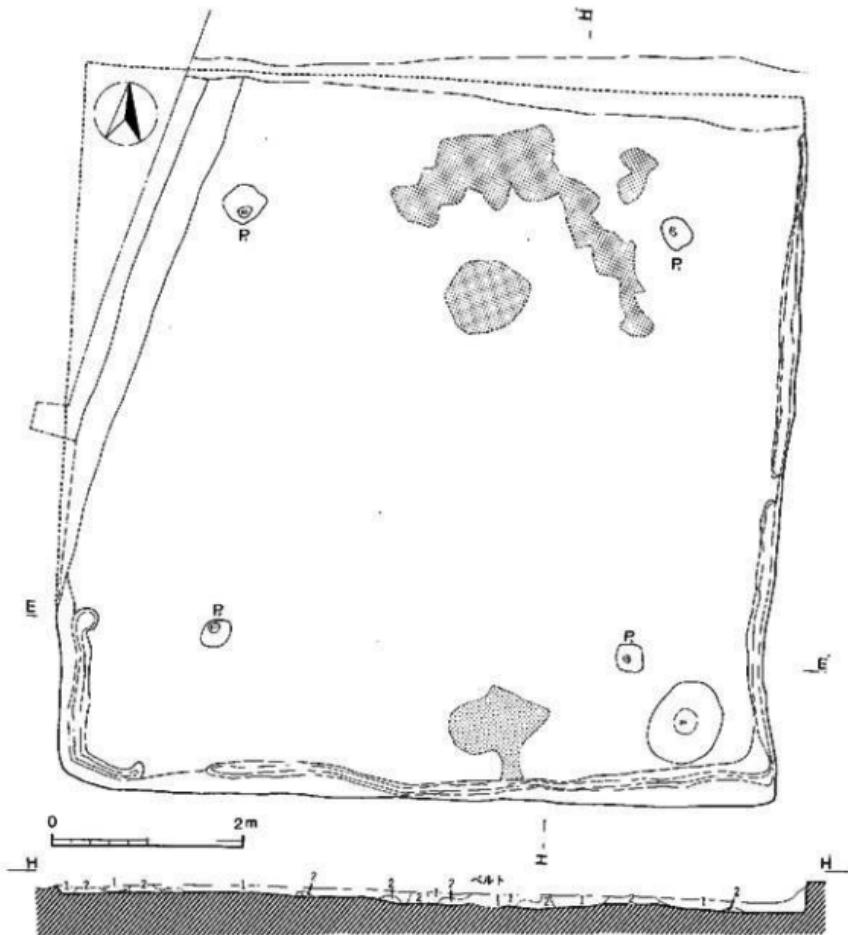


第11号住居跡 全景

遺跡西南隅に所在する大型の方形堅穴住居跡。西壁の北側を溝と道状造構で切られ、また北壁をカマ掘りによって掘りとられ、検出できなかった。南壁は調査区域と重なっている。残存状態は悪く、覆土層はわずかに二層、壁高も確認できた東壁で平均20cmにすぎない。傾斜は平均78°である。床面は標準工層の第4層を切りこんで造られている。全体として平坦であるが、南西に向かって傾斜しており、20cmの差がある。ピット10基が開口、柱穴は方形と台形で深さ50~79cm貯蔵穴はだ円で深さ39cmである。周溝は一部とされるが、壁確認部分では幅10~20cm深さは床面から1~6cmで全周している。堅い床面は検出されなかった。ピット1と4の間にやや高い部分がある。貼り床はない。住居中央やや北に炉を検出、地床炉で石はなかった。遺物は住居残存状態にくらべて多く、パン箱3箱である。壺3、高杯3、瓶1、陶1、コモ石などが含まれている。遺物、住居形態から和泉期のものと判定した。

表19

項目		内 容			
住 居	主軸方位	N-1°-E	炉	造り付け位置	住居中央やや北
	長 軸	約 7.5m		長さ 0.9m	幅 0.75m
	短 軸	約 7.5m		主軸方位	N-72°-E
	面 積	約57.6m ²		構 造	地床炉、焼土と灰が5cmずつ 堆積

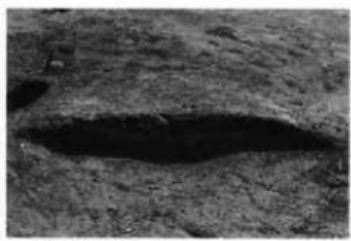


上層は
1. 水色青色上 C軸石混入、わずかに丸性あり、もたりあり
2. 前青色上 ところどころに1層の上部小ブリックで混入

図45 第11号生居跡 実測図



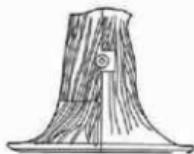
第11号住居跡 遺物分布



第11号住居跡 炉地断



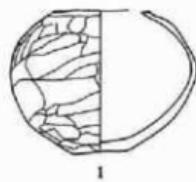
第11号住居跡 遺物



113



31



1



图46 第11号住居跡遺物実測図

② 第12号住居跡



第12号住居跡 全景

遺跡西部に所在する不整四辺形の堅穴住居跡、北壁東壁にくらべて、南壁、西壁が短かい。住居跡西壁にピットが重複している。覆土は基本的には2層、上はCを含む黒褐色土、下は粘性のある暗灰褐色土、削平されており残存状況は悪い。壁高も平均10cmを確認したのみである。平均傾斜は35°である。床面は、標準土層の第4層を切りこんで造られている。全体として平坦であるがでこぼこもある。貼り床あり、柱穴は4本確認されたが、規則性が見られない。周溝、貯蔵穴は確認できなかった。住居中央部から南西と北西よりに焼土を検出、両者ともレンズ状の堆積が見られたが、南のものは、焼土の量が少ない上、混入が多く、炉とは判断できない。北のものは、焼土が7~8cm堆積しており、石がないことから、地床炉と考えられる。遺物は住居規模にくらべて非常に多く、パン箱で6箱出土している。内訳は、壺3、壺16、高壺11、壇3、壺2、甌1、碗1、石斧1、すり石3などである。遺物、住居形態から、和泉期のものと判定した。

表20

住 居	項 目	内 容	炉		
	主軸方位	N-42°-E		造り付け位置	住居中央やや北西
	長 軸	4.01m		長さ	0.54m 幅 0.45m
	短 軸	3.82m		主軸方位	N-29°-E
	面 積	12.47m ²		構 造	地床炉、焼土が7~8cm堆積

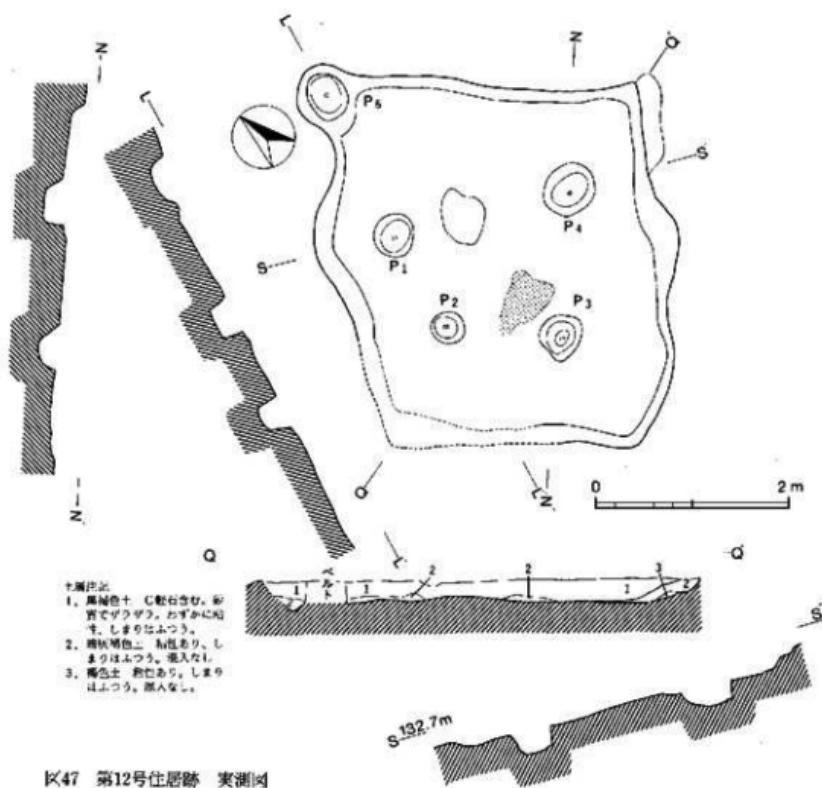


図47 第12号住居跡 実測図

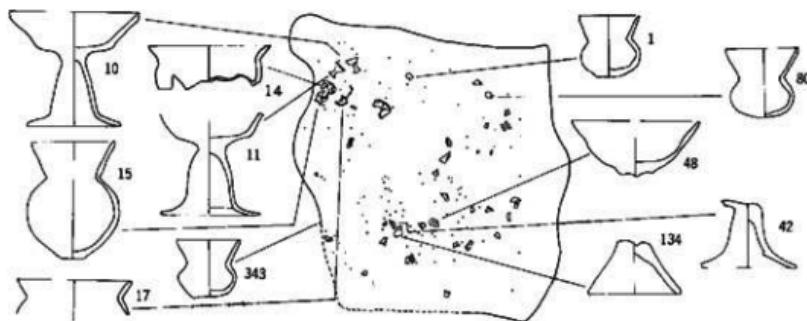


図48 第12号住居跡 遺物分布図

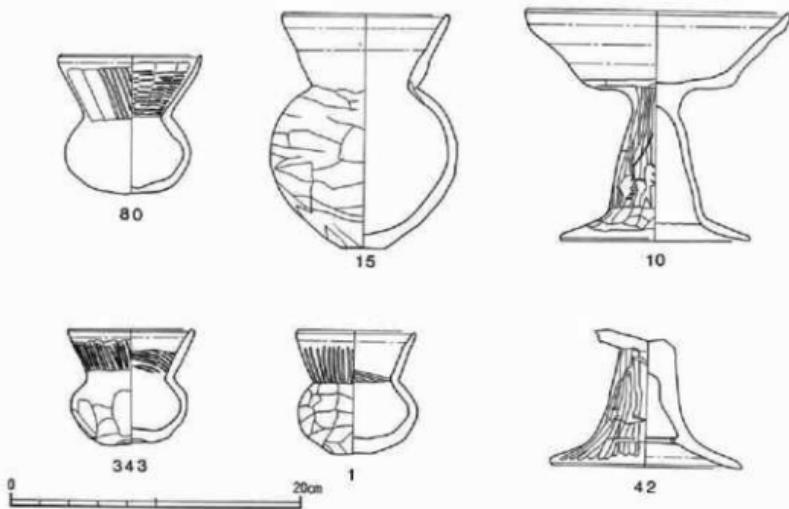


図49 第12号住居跡 遺物実測図

③ 第13号住居跡



第13号住居跡 全景

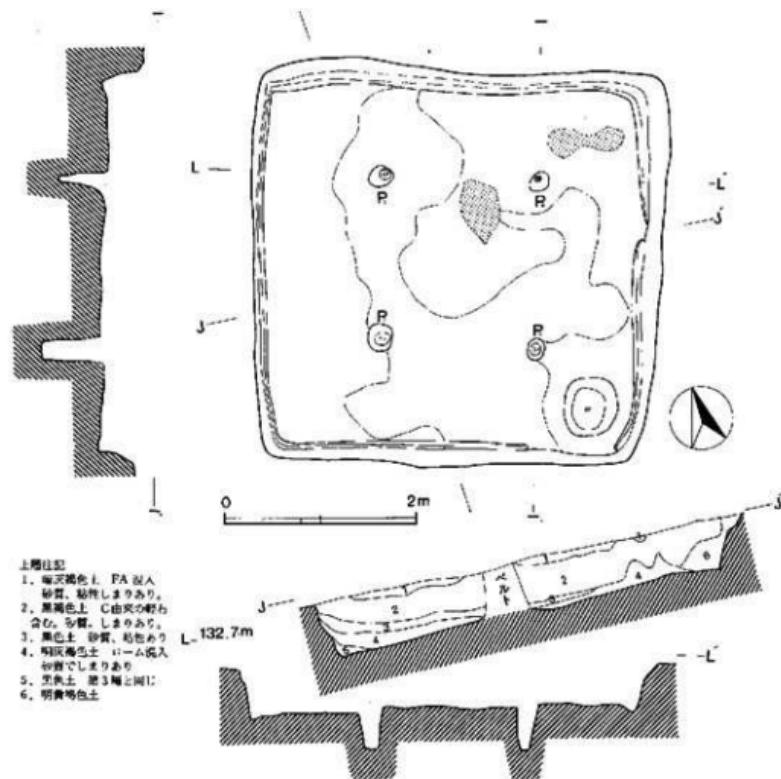


図50 第13号住居跡 実測図

遺跡西部に所在する台形の竪穴住居跡、南壁だけが他の壁より短かい、他の三壁の長さは等しい。覆土は4層、最上部はFAをわずかに含む層、2層目はC由來の軽石を含む、壁は垂直でシャープに切りこむ。確認壁高は平均52cm、推定で60cm、傾斜は平均77°、床面は標準土層の4層を切りこんで造られている。半らであるが北東から南西に向けて低くなってしまっており13cmの差がある。柱穴4本、貯蔵穴を検出、柱穴は深さ42~57cmのだ円、円形、貯蔵穴は深さ22cmのだ円、周溝は、東壁中央と南壁の一部を除いて幅12~37cm深さ床から1.5~5cmで全周。堅い床面は柱穴間のみで、中央部や壁際や炉のまわりにはない。炉は、住居中央やや北に検出した。遺物はパン箱で4箱出土。内訳は壺1、甕5、高杯4、瓶1、こも石21、器5などである。遺物、住居形態、土層から和泉期のものと判定した。

表21

住 居	項 目	内 容	炉	造り付け位置 長さ 幅 主軸方位 構造	住居中央やや北 0.69m 0.4m N-8°-E 地床炉
	主軸方位 長 軸 短 軸 面 積	N-19°-E 4.39m 4.36m 17.15m ²			

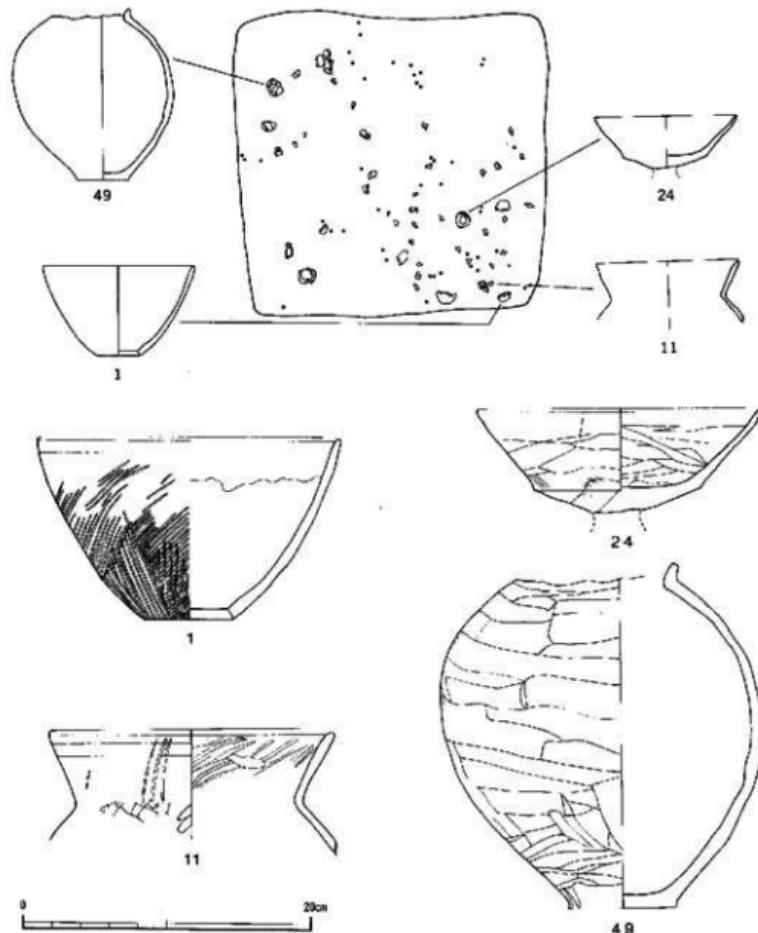


図51 第13号住居跡遺物分布図実測図

④ 第16号住居跡



第16号住居跡 全景

遺跡西端に所在する不整四辺形の竪穴住居跡、西壁、南壁にくらべて東壁、北壁が短かい。西を新しい溝と道状遺溝が切っている。覆土は3層を検出、上二層はC軽石を含む黒褐色土、三層目は地山との混土層。確認壁高は平均28cm、傾斜は平均70°、南東部は削られて浅くなっている。西壁は検出できない。床面は標準土層の第4層を切りこんで造られている。床面は平らで高低差はない。堅い床は南壁際のせまい範囲でのみ検出されている。柱穴は2本で、だ円形のものを確認したのみである。他に3つのピットを検出。内1つは入り口施設の可能性がある。貼り床がある。住居南西隅にL字型のくぼみがある。周溝が南壁中央と東壁北から北壁にかけて幅15~35cm、深さが床面から1~3.5cmでまわっている。貯蔵穴は検出できなかった。住居中央やや北よりの位置に炉を検出した。遺物は多く、パン箱で6箱である。内訳は壺6、甕20、高壺3、壺3、壺3、甕5、碗1、はそう1などで、他に石器も検出された。遺物、住居形態、土層などから、和泉期のものと判定した。

表22

項目		内 容		炉
住	主軸方位	N-7-E	造り付け位置	
	長 軸	4.67m	長さ 0.5m	
居	短 軸	4.25m	主軸方位 N-23°-W	
	面 積	約18m ²	構 造 地床炉	

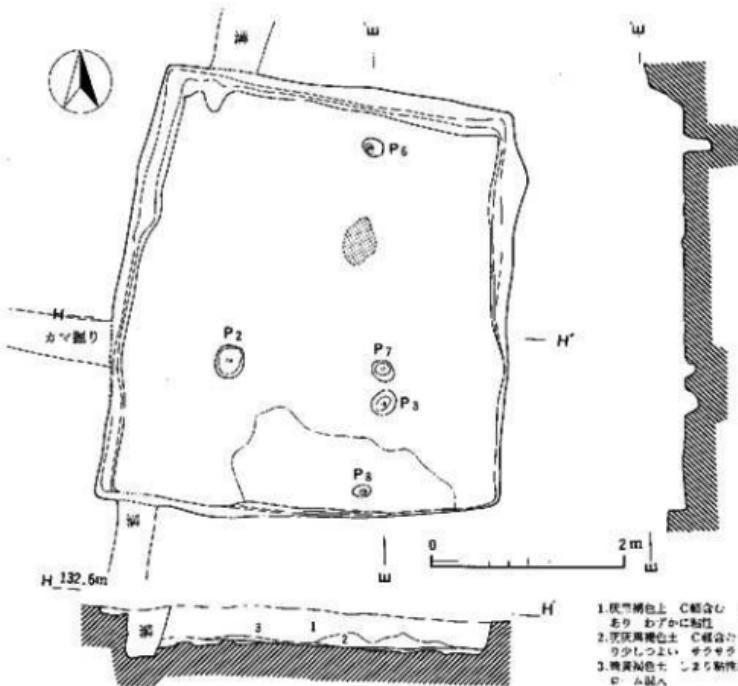


図52 第16号住居跡 実測図

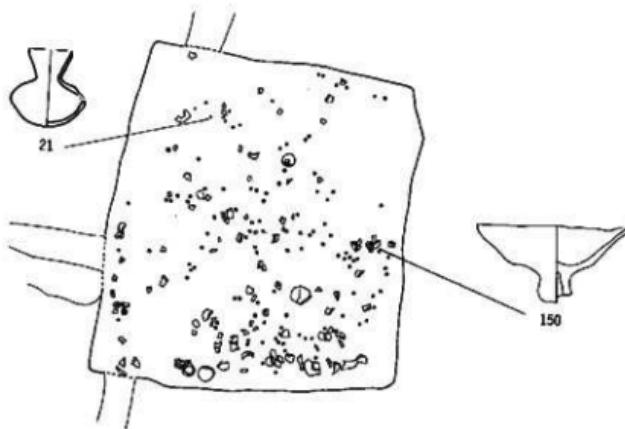


図53 第16号住居跡 遺物分布図

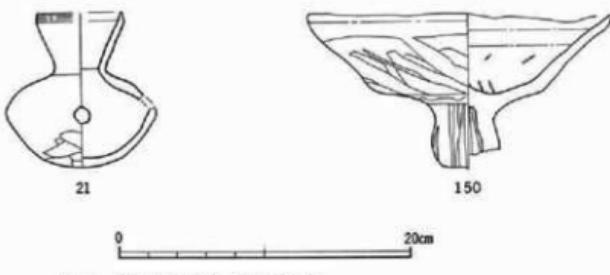


図54 第16号住居跡 遺物分布図



西田遺跡 スナップ

古 墳 (西田1号墳～5号墳)

① 第1号墳

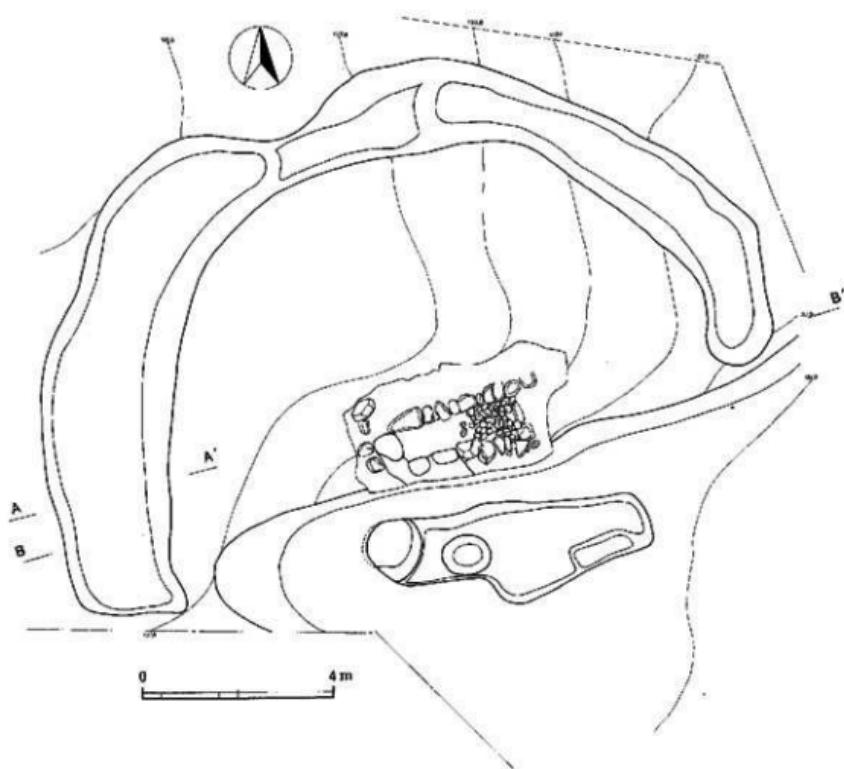


第1号墳 主体部

遺跡東端に所在する横穴式石室を持つ円墳。藤沢川を望む舌状台地の突端で、南東方向に視界が開けている。南に古い溝が2本あり、その方向に崩されていったものらしく、主体部を境に、ほぼ南半分は崩されて、比高差1mほどの崖状の地形になっていた。天井石はすでに失われており、石室内部にも土が堆積していた。石室築成の石は、旧利根川系の石英せん緑岩で、約1,000m南の河原から運びあげて使用したものである。石室は、自然石乱石積。地山を掘りこみ、粘土をしき、その上に疊をしきならべ、石を積み上げて造られていた。主体部の、粘土の下の黒褐色の中からFAを検出、このFAの軽石は、丸くなってしまっており、降ってから沢で丸くなり、洪水などで流されて入ってきたものと思われる。遺物は主体部から、人間の歯7、菅玉11、ガラス小玉12、刀子2、耳環5であった。他に周堀から円筒埴輪が多量に出土したが、完形になるものは1点であった。6世紀中頃のものと推定。

表23

墳 丘	項目		内 容		主 体 部	項目		内 容	
	群内の位置	形 式	規 模	年 代		構 造	規 模	入り口の向き	築 成 法
	群内 東端	円 墳	径12m、堀を入れると16m	6世紀中		横穴式石室	3.10×1.60m (主体部) 2.40×0.76m (石室)	N-72°-E	地山に黒色土をしき自然石積み



B 133.6m



A 132.5m

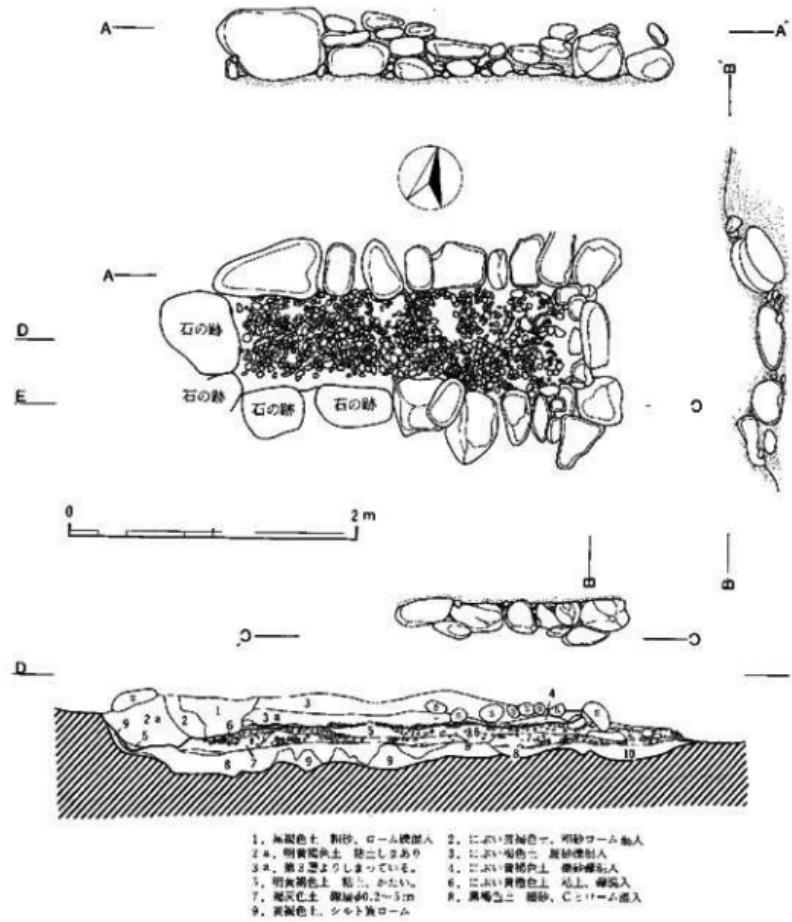
A'

土壤区分
1. 暗色 FA を少量混入、砂質で細かい。
2. 灰褐色 FA と暗褐色の粒性のちらりを混入
3. 黄褐色 土壌しまりあり。砾石混入



0 2 m

図55 第1号墳 実測区



E 132.9m



図56 第1号墳主体部実測図

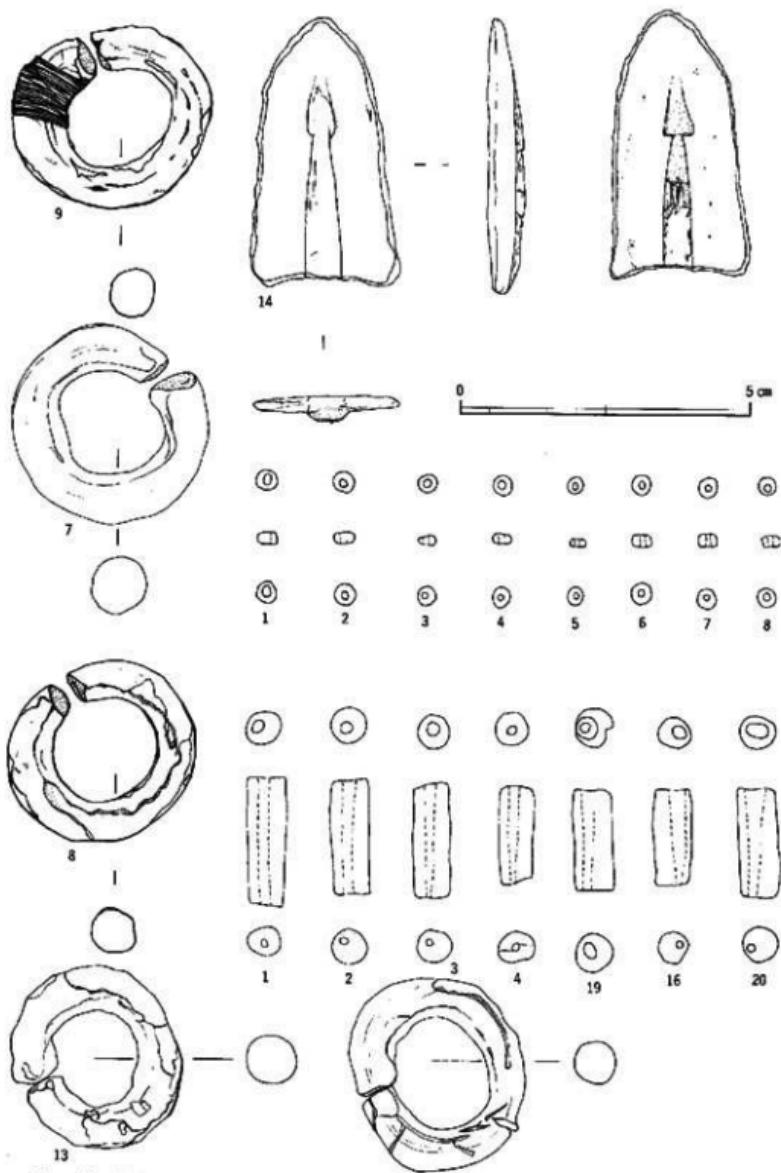


图57 第1号遗物实物图

② 第2号墳



第2号墳 全景

遺跡東部に所在する横穴式石室を持つほたて貝式古墳。古墳群内では、ほぼ中央の位置である。他の古墳と同じく削平を受け、主体部も破壊を受けていた。主体部は特に破壊が進んでおり、石がほとんど残っていなかった。石工が抜いたものらしく、工具による削りかすが検出された。主体部は地山を掘りこみ、粘土に黒色土を重ね、礫をしいてあった。石の抜き跡などから、横穴式石室と推定した。1号墳と同じく、旧利根川系の自然の河川を利用している。周溝は、幅2.4m深さ30cmほどでまわっているが、張り出し部に渡りが、幅1.5mほどで造ってあった。築成は、地山の上に、周堀を掘った土などをつみ重ねたものらしいが、表面から浅く、耕作が、遺溝確認面まで及んでおり、確認はできなかった。遺物は主体部から管玉、周堀付近から円筒埴輪が出土している他、流れこみと思われる石器が見つかっている。管玉は碧玉の石で、緑色である。6世紀中頃のものと考えられ、他の古墳と同じ頃のものである。横穴式石室としては、初期のものと見られ、掘り方に、竪穴式石室のなごりをとどめている。

表24

墳丘	項目		内 容		主 体 部	項目		内 容	
	群内の位置	形 式	規 模	年 代		構 造	規 模	入 口 の 向 き	築 成 法
	ほぼ中央	前方後円墳(ほたて貝式)				横穴式石室			
		前方部5m、後円部径13m、全長18.5m				5.0×1.8m (主体部)			
				6世紀中		確定できない			
						地山を掘り黒色土をしいた上に石積み			

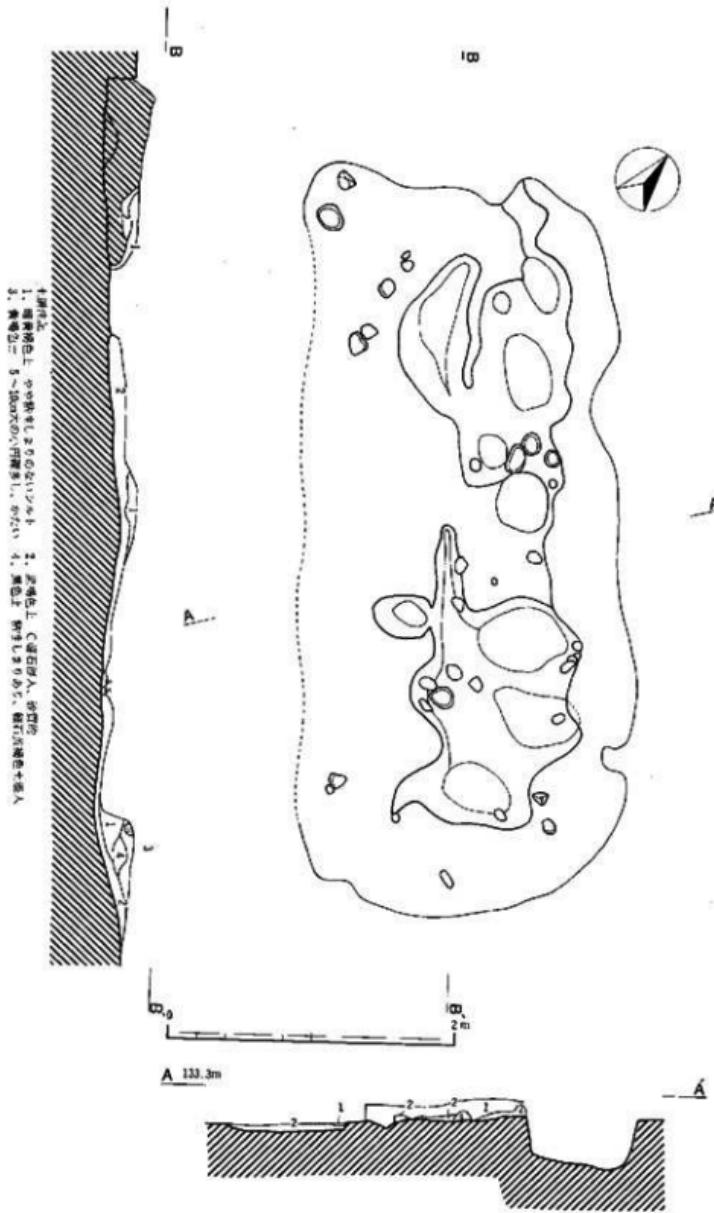


図58 第2号墳主体部実測図

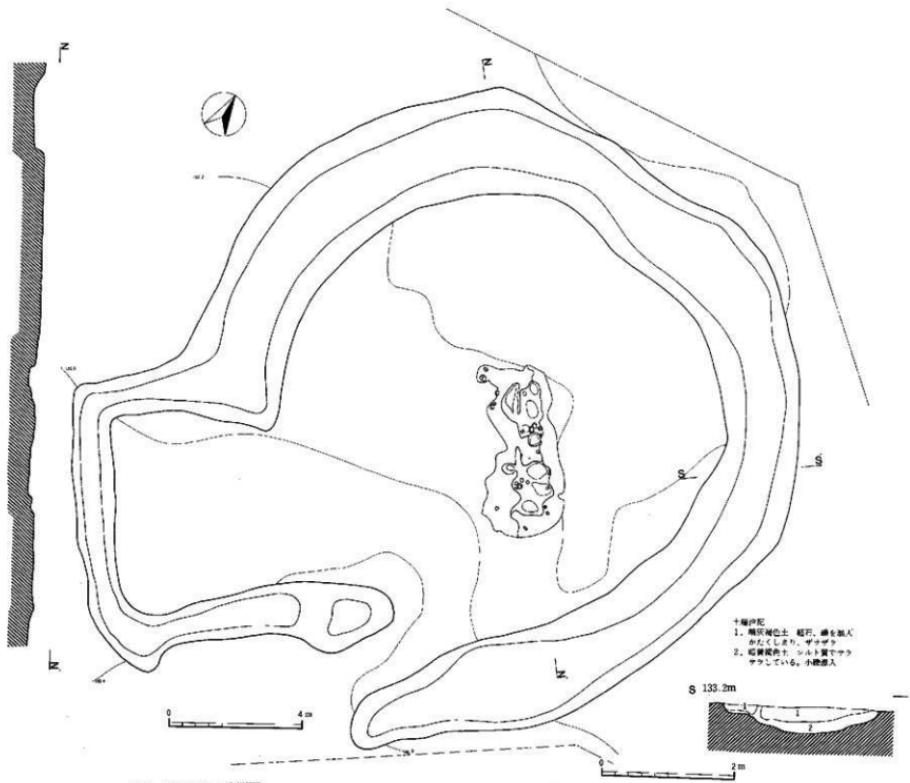


図59 第2号墳 実測図

③ 第3号墳

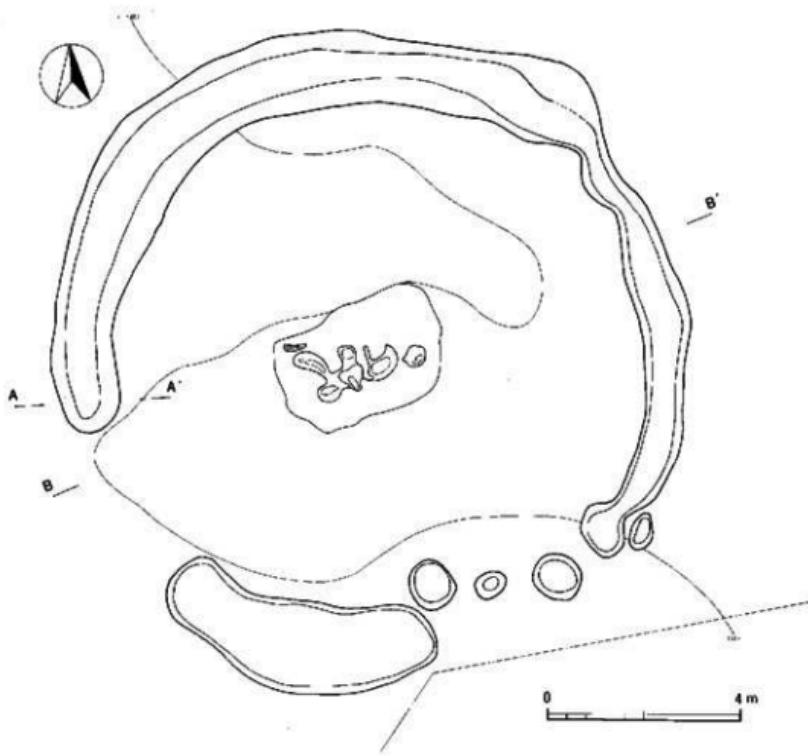


第3号墳 全景

遺跡中央に所在する横穴式石室を持つ円墳。他の古墳と同様削平を受けて破壊が進んでおり特に主体部は、カマ掘りが横切っており、石はほとんど抜かれており、様子をうかがうことは困難であった。地山を掘りこみ、粘性のある土とない土を交互にしきつめて築成してある。石は、旧利根川系の河原石を利用してあり、乱石積をしてあったようである。周堀は、一部削平のため確認できない部分があった。周堀底部と主体部の土にFAを確認。川のはんらん等で水がたまつた様子が見られ、流れこみのものであった。FA起源の角閃石が少量あるが、火碎流の淘汰されたものである。遺物は、周堀付近から円筒埴輪、主体部から管玉と鉄製品が検出された。管玉は蛇紋岩が滑石化したものである。他の古墳とほぼ同じ墳、6世紀中頃のものと判定した。遺物量は、破壊状態が進んでいることから少なく、パン箱1箱にすぎない。遺物等で実測可能なものは少なく、報告書にのせておいたものくらいである。

表25

墳丘	項目	内 容	主體部	項目	内 容
	群内の位置 形 式 規 模 年 代	中央部 南 円 墳 径11m、堀を入れると14m 6世紀中		構 造 規 模 入り口の向き 築 成 法	横穴式石室 3.60×1.40m（主体部） 確定できない 地山を掘り黒色土をしいた上に石積み



土壤柱型
 1. 黄褐色土 程度小礫混入、黄灰白をわずかに混入。しまりは
 固く、ザクザクしたもんじ。わずかに粘性あり
 2. 黄褐色土 第1層に黄褐色土が0.05m混入
 3. 黄褐色土 混入少なく、しまりも無い

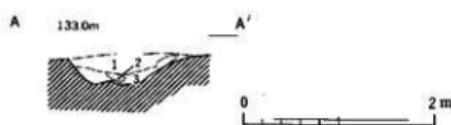
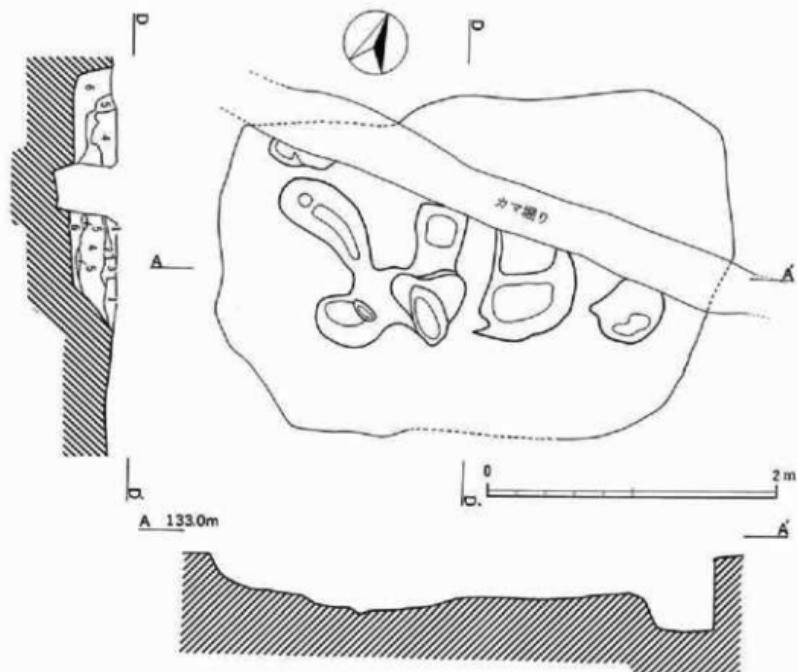


図60 第3号墳実測図

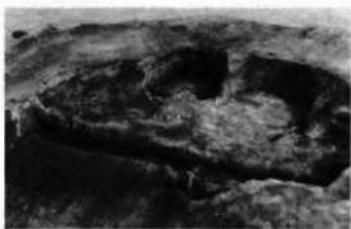


土壤注記
 1. 黒褐色土 砂質でかたい
 2. 緑褐色土 黏性あり、しまりあり
 3. ベルト部分
 4. 明黄褐色土 シルト質粘砂層
 5. 暗灰色土 粗砂層、粘性なし
 6. 黑褐色土 粗砂層、しまりややある

図61 第3号墳主体部実測図

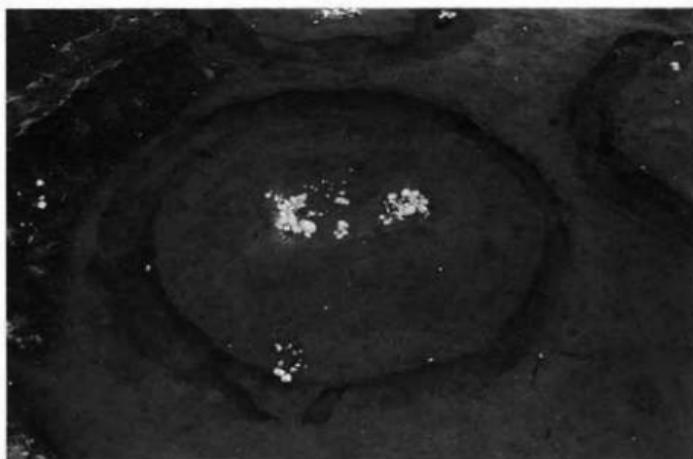


第3号墳 主体部全景



第3号墳 主体部掘り方

④ 第4号墳



第4号墳 全景

遺跡西端に所在し、横穴式石室を持つ円墳。周堀が全周する。堀西部が溝と道状遺溝によって切られている他、カマ堀りによって攢乱を受けているが、比較的残存状態は良好であった。主体部内の土よりFAに伴う軽石が出土しており、FA降下は築造前である。主体部は天井石はぬかれ、カマ堀りによって一部くずされていたが、ほぼ検出することができた。地山を掘りこみ、石積み部分は、非常によくしまったオーリーブ褐色土の土にしまりのある明黄褐色土の粘土がしかれその上に疊がしきつめられていた。石積みの外は、黒褐色土の上にしまりのある明黄褐色の粘土がしかれていた。この粘土層は、天井石の上までまわっていたようである。石室をつくっている石は旧利根川系の自然の河原石を利用して積み上げてあった。遺物は鉄製品2、耳環1、馬具らしいもの1などで残存状態に比べて少なかった。遺物量は、パン箱2箱である。築造年代は、遺跡の他の古墳と同じ、6世紀中頃と判定した。

表26

墳丘	項目	内 容	主 体 部	項目	内 容
	群内の位置	群内 西端		構 造	横穴式石室
形 式	円 墳			規 模	4.40×2.20m (主体部) 2.40×0.6m (石室)
規 模	径10.5m、堀を入れて13m			入り口の向き	N-126°-E
年 代	6世紀中			築 成 法	地山を掘り、黒色土をしいた上に石積み

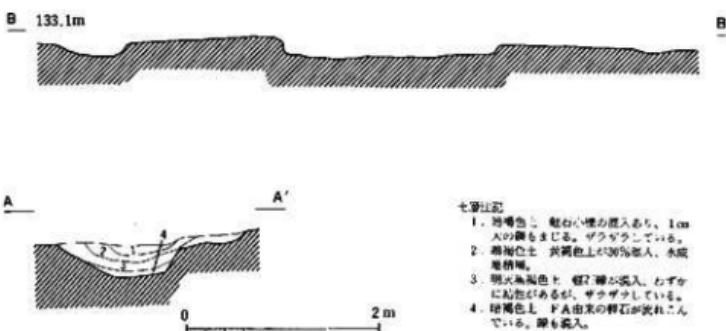
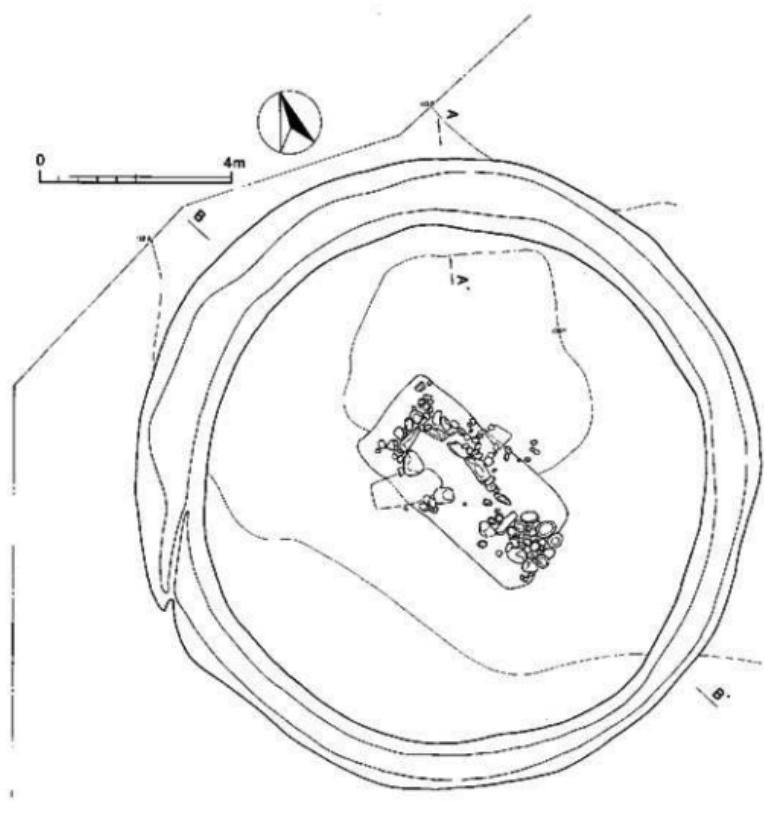


図62 第4号墳実測図

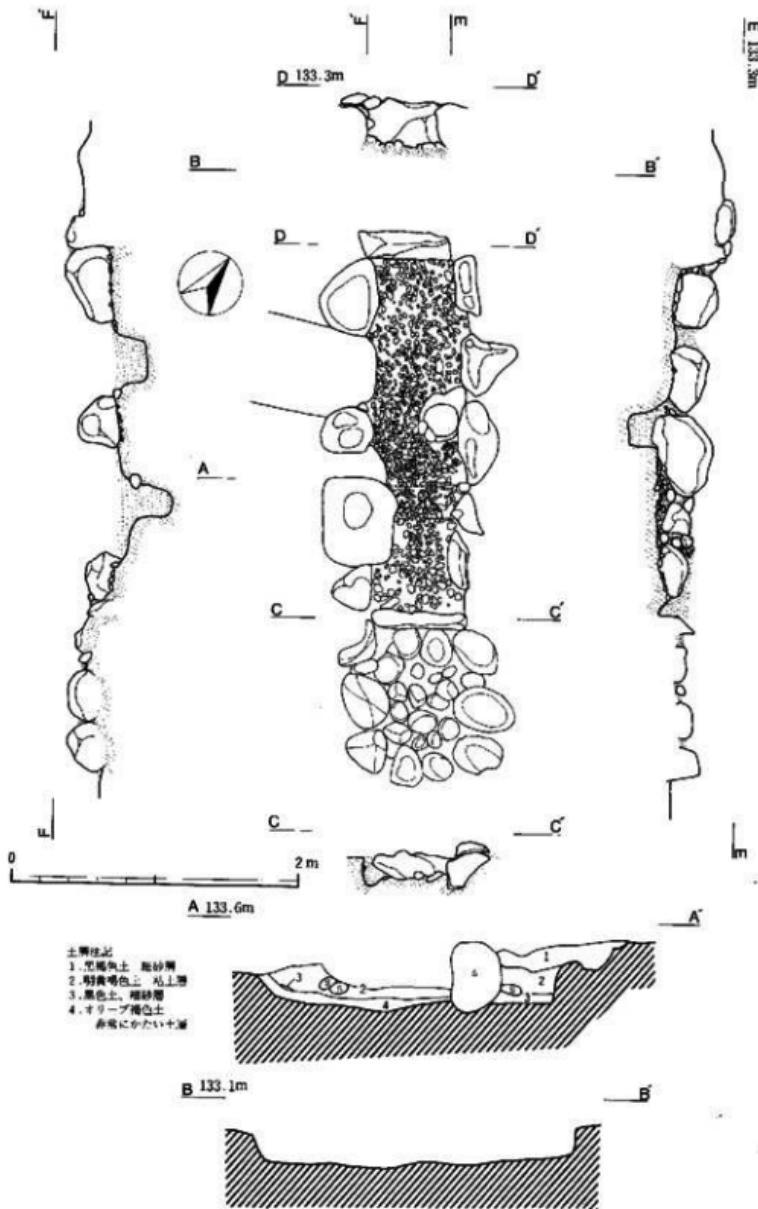


図63 第4号墳主体部実測図

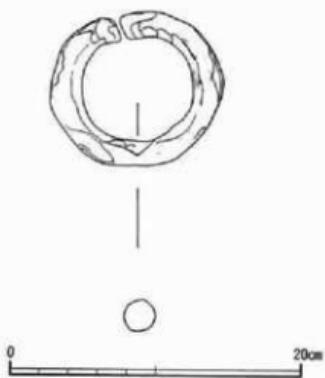


图64 第4号住居跡 遺物実測図



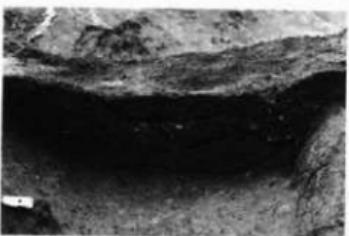
第4号墳 主体部



第4号墳 主体部検出状況



第4号墳 主体部地断



第4号墳 周囲地断



第4号墳 主体部掘り方

⑤ 第5号墳

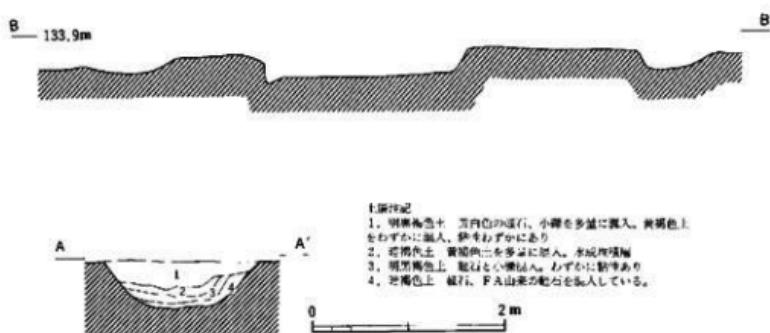
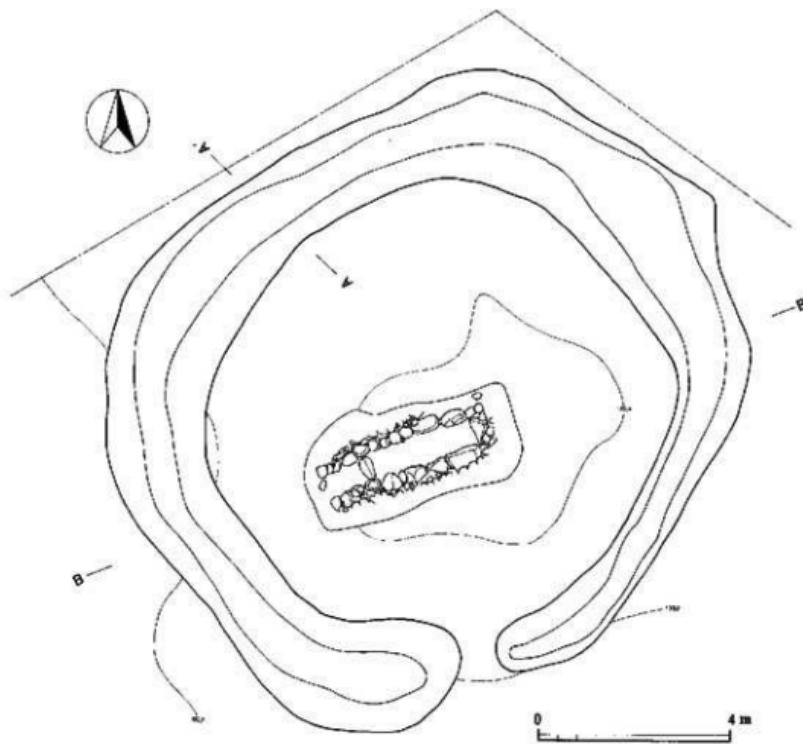


第5号墳 全景

遺跡中央北端に所在し、横穴式石室を持つ円墳。周囲がめぐっているが、南に渡りと思われる部分があり全周はしていない。5基古墳の内では、最も残存状態が良く、遺物も多く検出できた。主体部上からC軽石を確認した。主体部は、天井石が抜かれていたが、他は良く残っていた。地山を掘りこみ、黒褐色土、黒色土をしき、その上の明黄褐色土の粘土層上に、礫層がある形になっている。主体部からは須恵器の破片、人間の齒、管玉4、ガラス小玉8が出土している。周囲北西部からは、有孔円板が出ている。材質は蛇紋岩が滑石化したものであった。主体部の石は、他の古墳と同じく、旧利根川系の自然の河川石を利用している。築造は、FA降下の後で、6世紀中頃と考えられる。主体部北西部に縄文時代の19号住居跡が重複しており、築造時に住居跡は大きく破壊されている。主体部内の土から、FAに伴う軽石が出土したことから、築造を、FA降下後と判定したものである。

表27

墳丘	項目	内 容	主體部	項目	内 容
	群内の位置 形 式 規 模 年 代	中央部北 円 墳 径9.5m、堀を入れて14m 6世紀中		構 造 規 模 入り口の向き 築成法	横穴式石室 4.50×2.0m (主体部) 2.20×0.6m (石室) N—109°—W 地山を掘り黒色土をしいた上に石積み



土断面記
 1. 明褐色色土、瓦白色の礫石、小砾を多量に混入。黄褐色土をわずかに混入、芦もわずかにあり
 2. 灰褐色土、黄褐色土を多量に混入。水成堆積層
 3. 明褐褐色土、鈍頭と小砾混入。わずかに粘性あり
 4. 灰褐色土、礫石、F丸山系の砂岩を混入している。

図65 第5号墳実測図

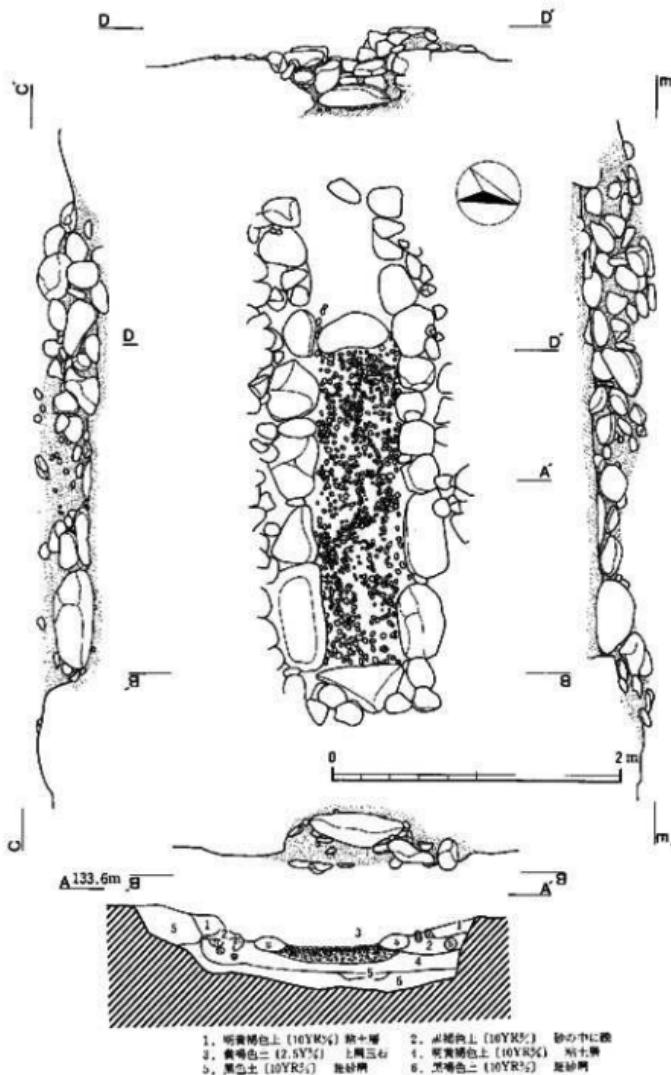


図66 第5号墳主体部実測図

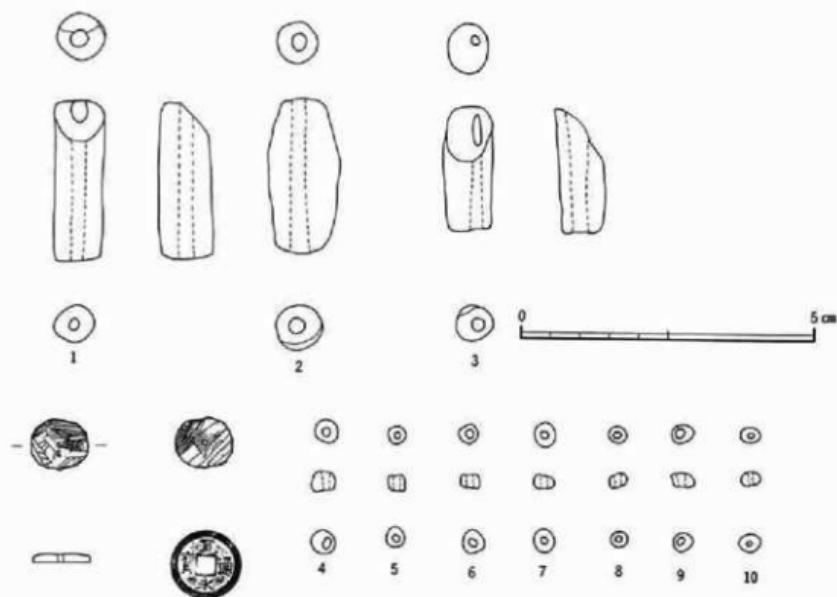


図67 第5号墳 遺物実測図（有孔円板は $\frac{1}{2}$ 、拓本は $\frac{1}{2}$ 、他は原寸）



第5号墳 主体部



第5号墳 主体部掘り方

その他の遺構

西田遺跡からは、住居跡、古墳以外の遺構として、溝、道状遺構、集石遺構、ピットが検出されている。

溝は3条検出され、溝のうち溝6号は、遺跡南を北西から南東に横切る谷地で、古いものと思われる。溝7は、第1号墳南を東西に横切る近世の溝である。溝8は、遺跡地最西端を北東から南西に通り、第4号墳の周堀と、第16号住居跡を切って通っている。この溝8はすぐ東に道状遺構が平行にのびていた。

道状遺構は巾25cm~30cmほどで、非常に堅くつきかためられた面が、溝8と平行してつづいていた。

集石遺構は、第4号墳丘上と、第5号墳丘上で検出されている。第5号墳丘上のものは、石臼の破片を含んでおり、新しいものである。

ピットは、遺跡内に31基を検出した。遺物が検出されたものは第43号でありキセルが出土している。



溝9号 全景



西田古墳 全景



集石遺構 1



集石遺構 2

ま　と　め

この遺跡は、濃密散布地で、上師器の破片の他、埴輪、縄文土器の破片が散布していたことから、住居跡の他、古墳の存在も予想されていた地である。

調査は二面で実施し、最初に、和泉期の土器を作り豊穴住居跡4軒と、古墳時代後期、6世紀中頃の古墳5基を検出した。その後、古墳の墳丘部を掘り下げ、縄文時代前期前半、関山式期の土器を作り豊穴住居跡3軒を検出した。

古墳は、円墳が4基、ほか貝式古墳が1基である。石室は、天井石が、耕作の障害物として扱われ、抜きとられ、あるいは石工の手によって再利用されるため取り去られるなどして、破壊が進んでいた。

3基の古墳で主体部を、比較的良好な状態で検出されたが、他の2基は、石がほぼ完全に抜きとられており、主体部の大まかな様子をつかむにとどまった。

型式は、すべて横穴式石室の初期のもので、周堀底にFA出米の軽石が流れこんでいることなどから、FA降下以後造られたものであると判定した。主体部築成も、掘り方を造るなど、豊穴式石室のなごりが見られる。

主体部から、管玉、耳環、ガラス小玉、刀子、人の歯、鉄製品が出ている。

古墳の周囲から出土した埴輪は、99%が、円筒埴輪であり、形象埴輪は、破片から、その存在を予想したにとどまった。

和泉期の住居は、地表から浅いところから検出され、壁も一軒をのぞいては、20cmほどのものであったが、遺物は非常に多く、残存状態とは異なる出土状況であった。本文中に示したように多くの、又多種の遺物が出ており、研究の良い資料を提供できたと思う。

住居内の施設は、ほぼ検出でき、すべて地床炉であった。

縄文住居跡は、古墳墳丘下に存在し、周堀の底から上器が出土したことから存在を予想したものである。古墳築造時に破壊を受けており、遺構の検出には困難をともなった。

遺物は、土器では実測可能なものはなく、拓本で示したのみである。住居内の施設もほとんど検出できなかった。

遺跡は、地形と遺物の散布から考えると、南側の宅地、西側の桑畠にまで広がっており、古墳和泉期の住居跡、縄文時代の住居跡の存在が考えられるが、調査区外であり、発掘は行なわれなかつた。

大明神遺跡(D区)

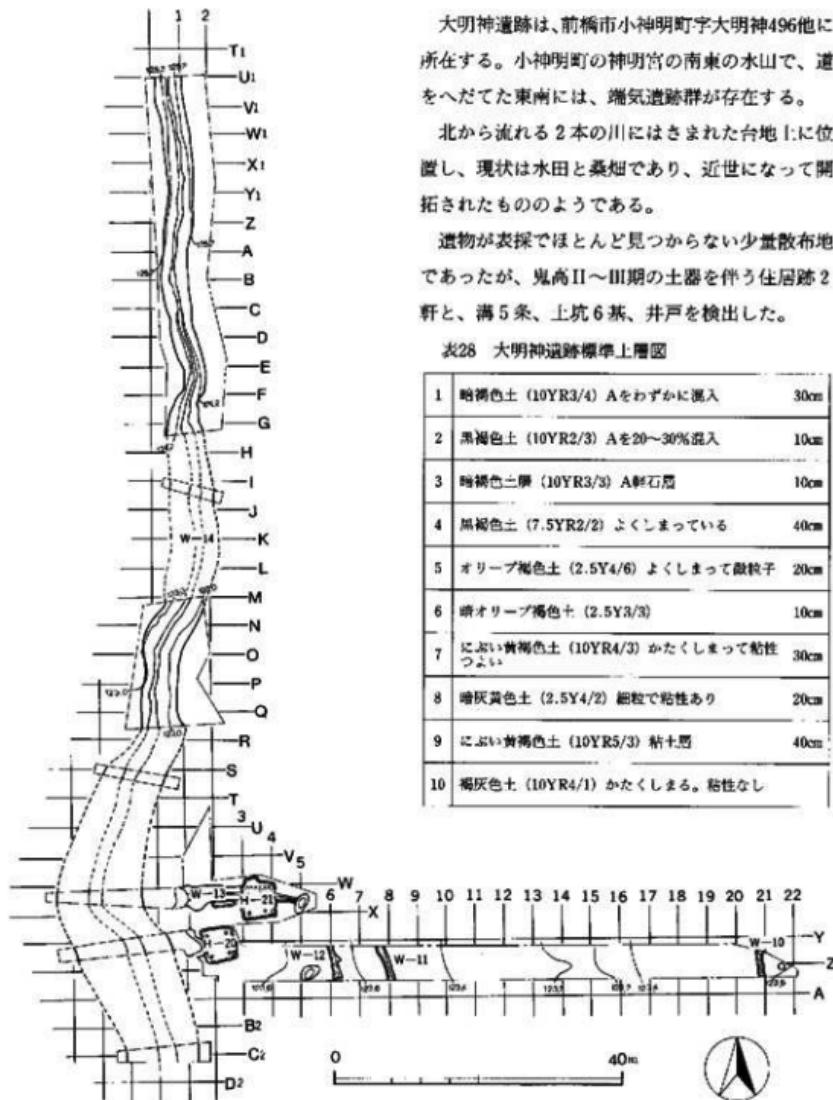


図68 大明神遺跡全体図

鬼高II～III期の土器を伴う遺構

① 第20号住居跡



第20号住居跡 全景

遺跡南に所在する不整長方形の竪穴住居跡。北壁、西壁にくらべ、東壁、南壁が短かい。西壁は、近世の用水路開削により削りとられている。地表から30cmと浅い深さでの検出であり、耕作による破壊が進んでいた。検出した時、住居北側は床面が出ており、覆土は1層を確認したのみである。標準土層の第7層を切りこんで作られている。貼り床を6cm作ってあり、平坦である。柱穴4本と貯蔵穴の他ピット1を検出。貯蔵穴は住居東南隅でカマドの南に方形で開口、柱穴は30～40cmの深さがあった。壁高は14cmを確認した。壁の角度は平均71°であるが、ほとんど存在していないとの同じである。住居跡東壁やや南よりにあるカマドも破壊が進み、わずかに検出できただけである。遺物は、壺3、甕1、碗1など、パン箱で1箱を検出した。遺物が少なく、また形成になるものが少ないとから、時代判定はやや困難であったが、鬼高II～III期のものと判定した。

表29

住 居	項 目	内 容	か ま ど	造 り 付 け 位 置	住居東壁やや南より (1.2:1)
	主軸方位	N-80°-E			
	長 軸	4.95m	ま	長さ 1.8m	幅 1.7m
	短 軸	4.85m	ど	主軸方位	N-68°-E
	面 積	22.26m ²		構 造	地山を掘り下げ、暗褐色土、白色粘土で構築

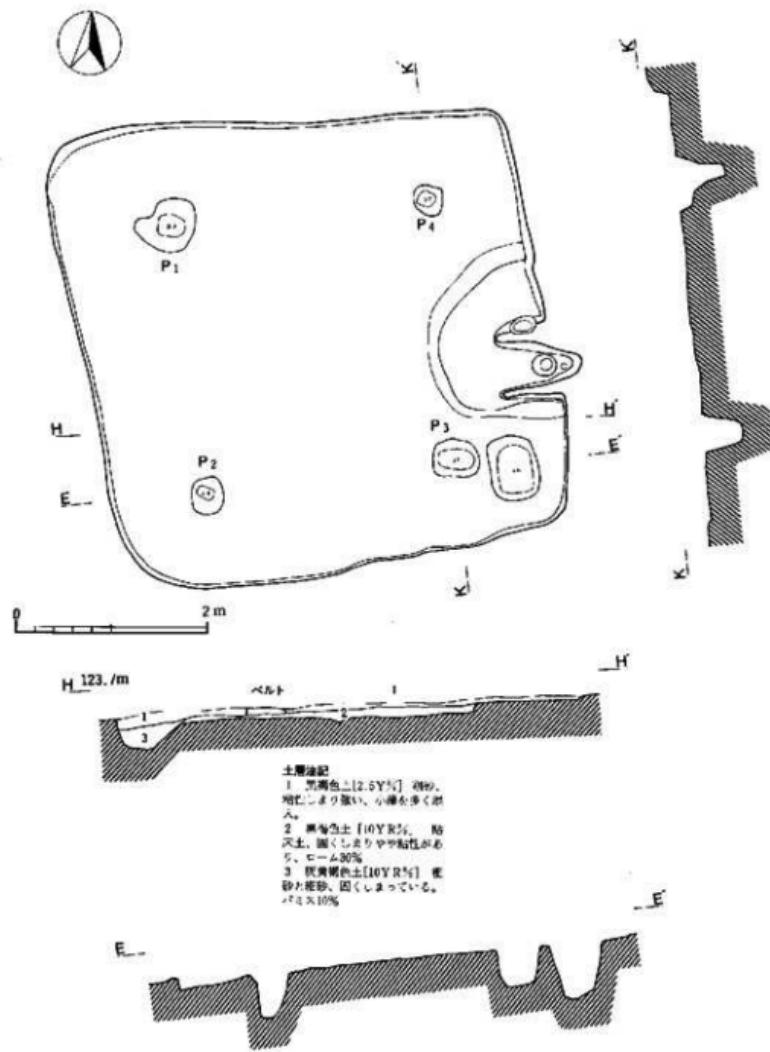


図69 第20号住居跡 実測図

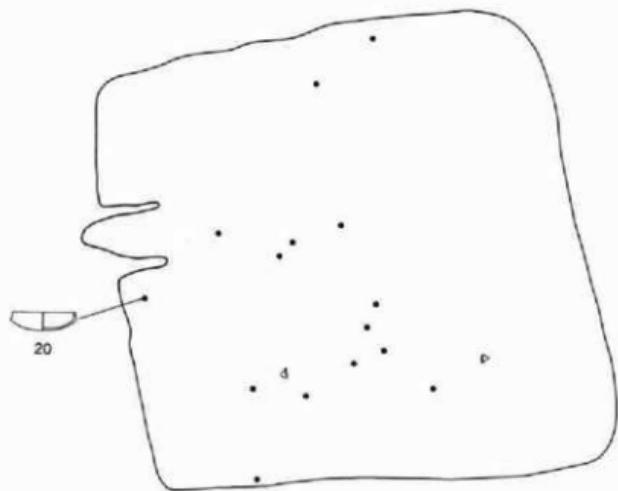


図70 第20号住居跡遺物分布図

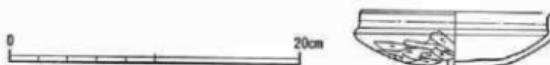


図71 第20号住居跡 遺物実測図



第20号住居跡 地断



大明神遺跡 スナップ

② 第21号住居跡



第21号住居跡 全景

遺跡南部、20号住居跡の北東に所在する不整長方形の竪穴住居跡。西壁、南壁にくらべ、北壁、東壁が短かい。土坑、溝との重複が激しく、南壁と西壁の一部、カマドの南半分を検出し、他は部分的に検出した床面や壁から全体を推定するにとどまった。柱穴4本と貯蔵穴を確認した。しつかりした形で検出でき、深さも20~40cm、貯蔵穴は60cmもあった。周溝はめぐっていないが貼り床が検出されている。覆土は、20号と同じく、地表から浅く耕作による破壊が進んでいたため、一層を確認したのみである。壁高は19cmを確認、平均傾斜度は、78°で、ほとんど垂直に近い。床面は、標準土層の第7層を切りこんで造られている。平坦でわずかに南西に傾斜している。焼土が東北部にわずかに見られた。カマドが住居東壁やや南にある。左袖部分を溝が通っており、残存状態は良くない。支脚の石と思われるものが焚口部にあったが、袖石は見つからなかった。坏、こしきが出土している他、須恵の破片が見つかっている。遺物や住居形態から、鬼高II~III期のものと判定した。

表30

住 居	項 目	内 容	か ま ど		
				造り付け位置	住居東壁やや南(1.3:1)
	主軸方位	N-83°-E		長さ	1.0m 幅 1.03m
	長 軸	5.05m		主軸方位	N-85°-E
	短 軸	4.97m		構 造	地山を掘りこみ、暗褐色土をしき、褐色土で構築
	面 積	約16.4m ²			

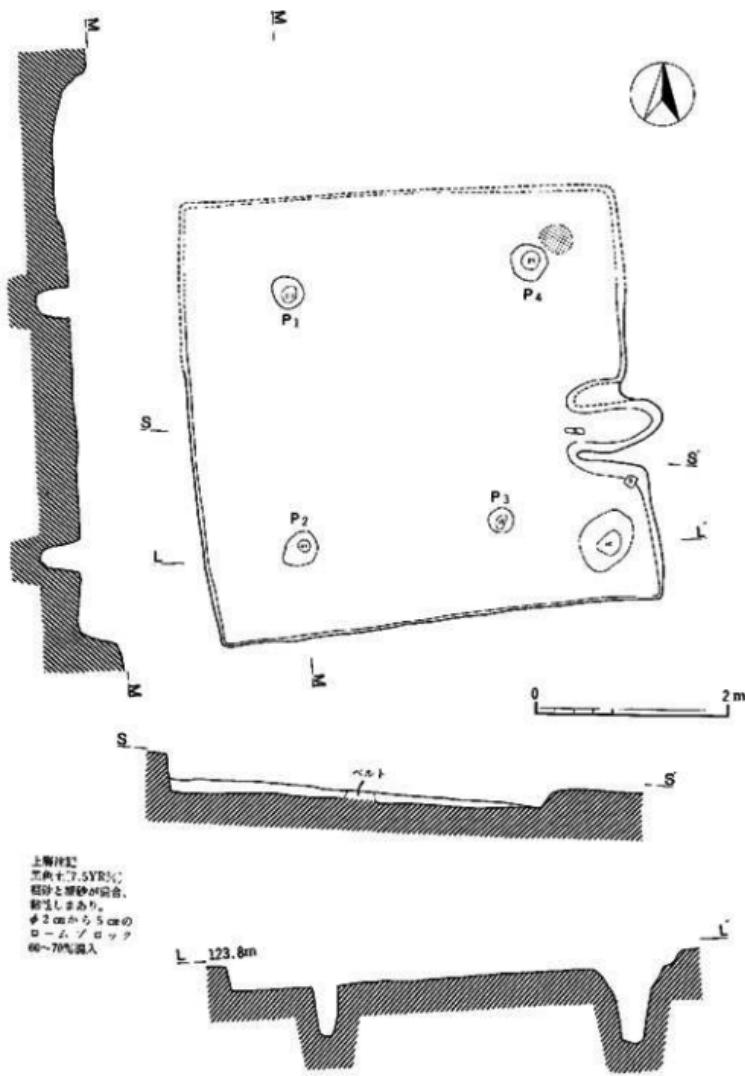


图72 第21号住居跡実測図

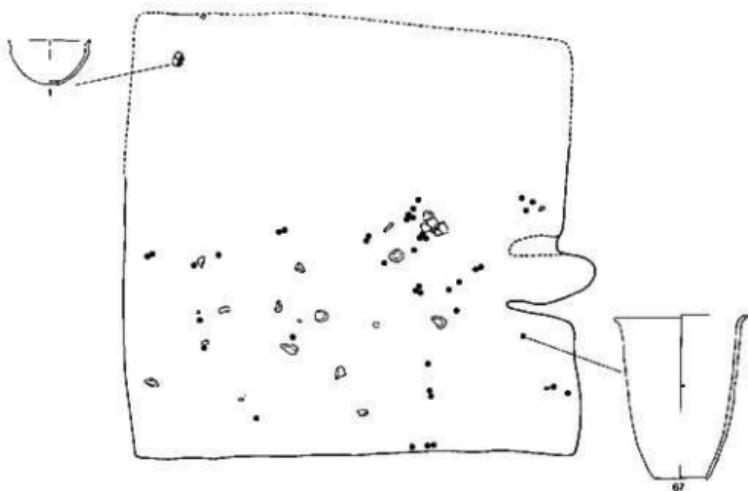


图73 第21号住居跡遺物分布図

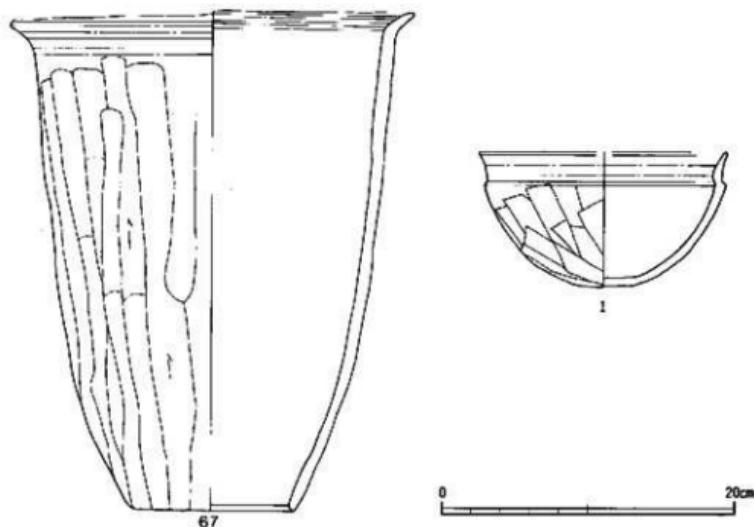


图74 第21号住居跡 遺物実測図

その他の遺構

本遺跡から検出された遺構は、住居跡の他に、溝5条、土坑6基、井戸1基である。

溝9、10、11は遺跡を南北に横切るもので、近世の溝である。溝12は、遺跡の南部を東西に通り、第12号住居跡を切っている。溝13は、遺跡の中央を、北から南に流れる自然河川の跡である。溝13は、覆土層下部に、水流によって攪乱を受けたFA層が存在しており、6世紀代以前にさかのぼることが確認された。水源は、現在の河川と同じと思われ、この地が、近世に開田されていることから考えて、その頃には、完全に埋もれていたか、その際埋められ、東西につけ変えられたとも考えられる。

土坑は6基、だ円形から長方形のものまでが存在し、遺物は検出されていない。

井戸は、遺跡東端で検出した。径80cm、深さ240cmで、底に石がおいてあり、近世の耕作の水を求めるためのものと考えられる。附属施設は検出されなかった。

ま　と　め

本遺跡地は、遺物の少量散布地であり、遺構の数はあまり多くないことが予想された。

道路予定地部分の調査であり、南北分は、予定区内の全掘、北半分は、トレンチ発掘で様子を見たものである。調査の結果、南北のトレンチは拡張され、溝13を完掘し、南へ、規模と方向確認のためのトレンチを入れた。

本遺跡は、小神明遺跡群よりも、竪気遺跡群に、地形的にも、遺跡の内容からも近いものである。

近世に開田が行なわれたことにより、削平と土盛りで、検出された遺構までの土の厚さはうすく、破壊が進んでいた。

壁もほとんど検出できない状態で、切り合いによって、全体の形も完全にはつかめなかった。遺跡は、調査区外に広がっていることが予想される。

遺物は少なく、中、近世のものも、埋土、表探で得ることができた。縄文土器も表探で見つかっており、同時代の遺構が近くに存在することが予想される。

遺跡地西端に墓地として使用されていた小山があったが、調査の結果、自然の盛り上がりであることがわかった。



溝 14号



作業員さんを囲んで 記念撮影

小神明遺跡群II (58C-1)

倉本遺跡 九料遺跡

西田遺跡 大明神遺跡

昭和59年3月25日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 前橋市教育委員会

前橋市大手町二丁目12番1号

印 刷 朝日印刷工業株式会社

前橋市元続社町寺町67番地

柏川村出土文化財管理センター

